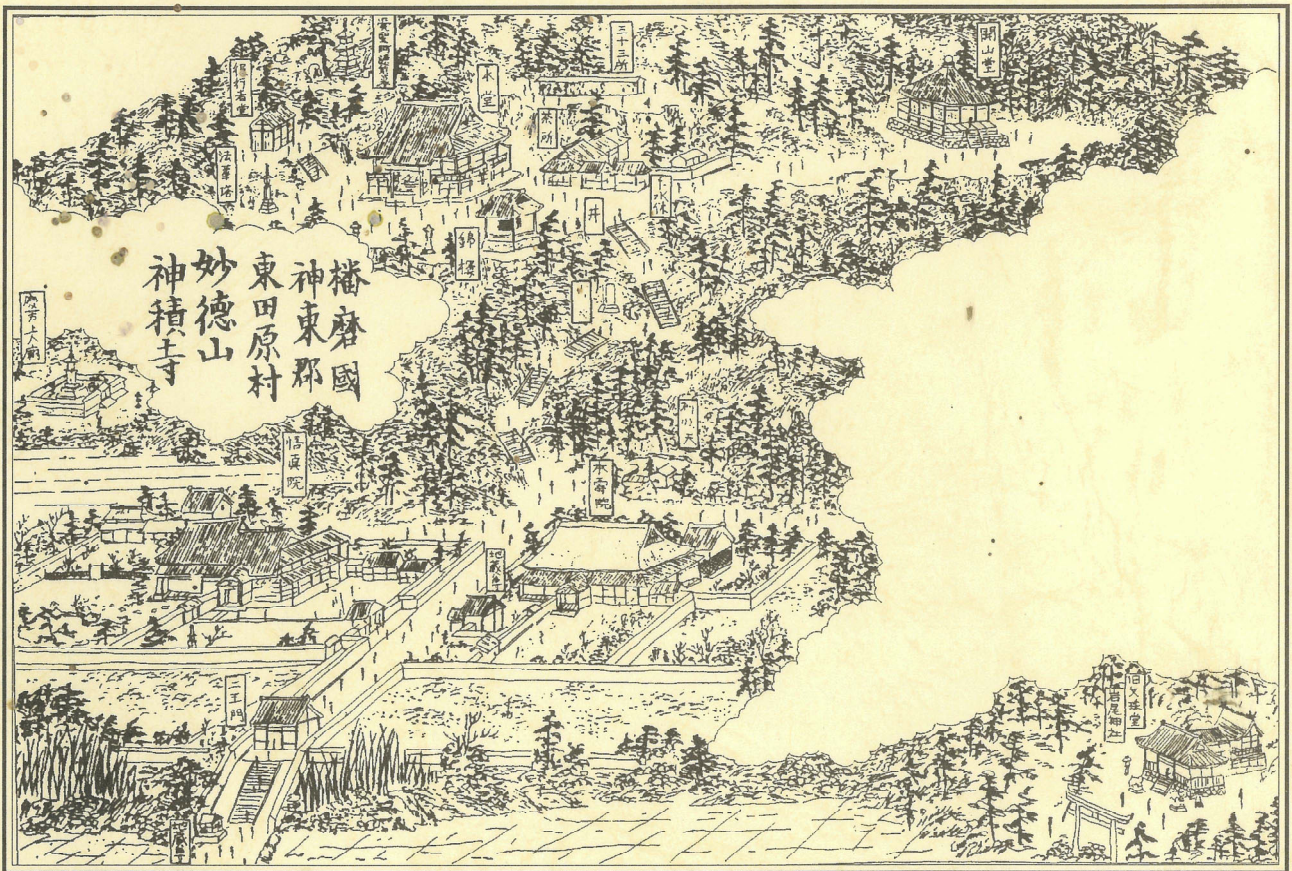


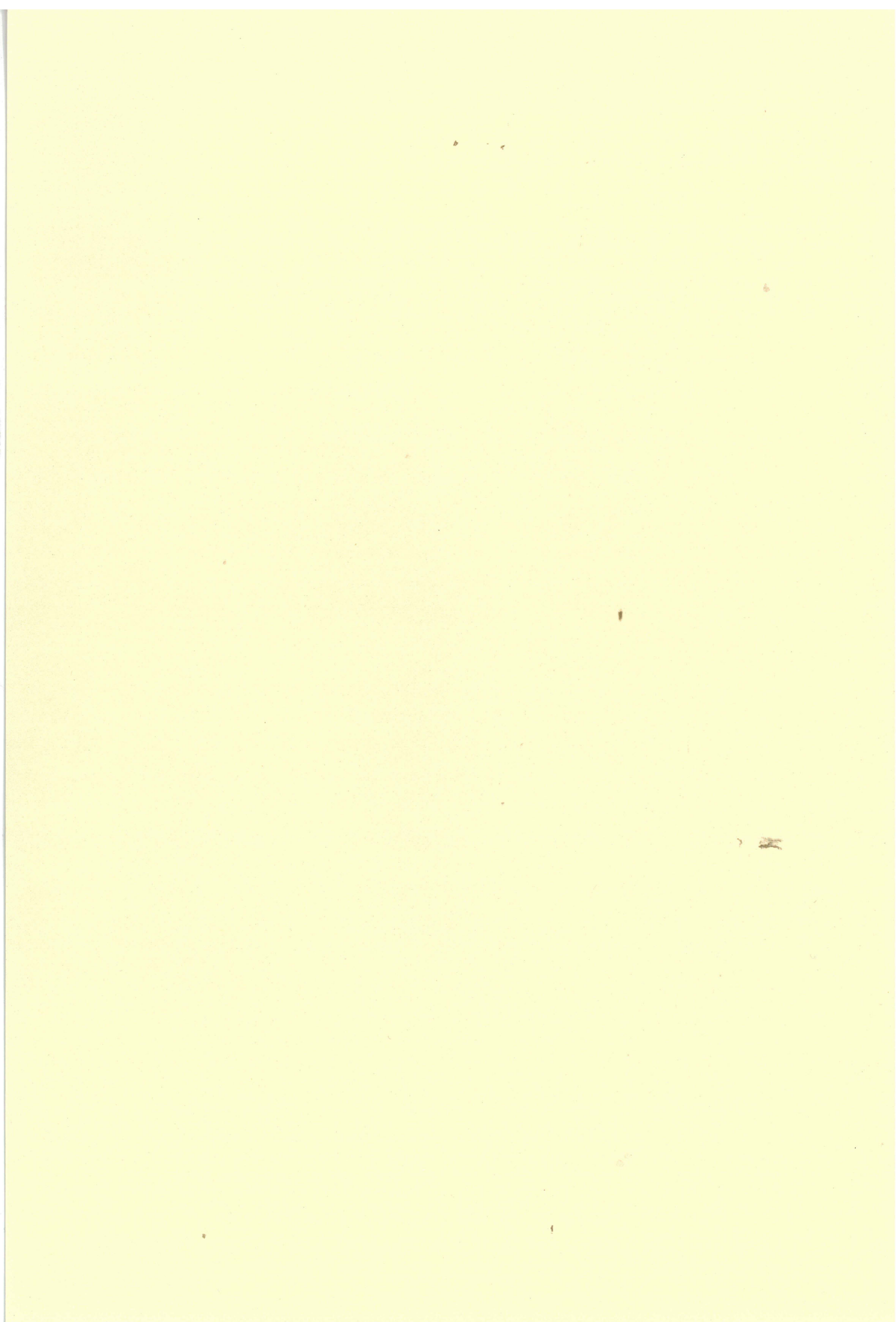
—フロヤ池改修工事に伴う緊急発掘調査概要報告—

妙徳山神積寺遺跡



1999年3月

兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会





神積寺遠景

－フロヤ池改修工事に伴う緊急発掘調査概要報告－

妙徳山神積寺遺跡

1999年3月

兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会

例 言

1. 本書は、フロヤ池改修工事に伴う、兵庫県神崎郡福崎町東田原字妙徳山に所在する妙徳山神積寺遺跡の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、福崎町教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査経費は福崎町が負担した。
4. 航空写真は、国際航業株式会社より提供を受けた。
5. 現地調査は以下の通りである。
発掘調査
平成10年11月11日～平成10年11月13日
6. 調査体制は、以下の通りである。
平成10年度発掘調査
調査事務局
教 育 長 吉識正明
社会教育課長 北山正和
課 長 補 佐 松岡英二
主 査 出田 直
調査担当
調 査 員 出田 直
調査補助員 谷川晴彦（神戸学院大学）
整理作業は、出田 直（福崎町教育委員会）が担当した。
7. 本書の、執筆・編集は、出田が行った。
8. 遺構の実測、写真、製図は谷川の協力を得、一部は出田が行い、遺物に関しては実測、製図は出田が行い、写真は谷川、三船裕崇（竜谷大学）、三船耕平（京都大学）の協力を得た。
9. 方位は基本的に磁北を示す。また、標高は町道に付設してあるK. B. Mを利用した。
10. 溝にはSDと略号を付した。
11. 調査・整理の実施にあたって下記の方々にお世話になった。（順不同・敬称略）
長谷川義信、長谷川豊、山田正英、松岡正、柳田春孝、柳田敏郎、西井康雄
西井正実、難波豪、水田吉之、大塚善忍、長沢康夫、伊藤美砂子、桜井智子
谷川晴彦、宮原文隆、森下大輔、神戸佳文、村上泰樹、大沢政雄、木建正宏、南憲和
振角卓哉
兵庫県教育委員会、福崎町産業課、妙徳山神積寺、悟真院、神崎郡歴史民俗資料館

あ い さ つ

妙徳山神積寺は、天台宗の古刹で七堂伽藍と52の院を有するほどに隆盛を極め、播磨天台六山の1つに数えられるほどの寺院になったといえます。創建も正暦二年（991）と伝えられていますが、当時の様子が具体的に分かる資料は今のところ分かっていません。

ただ、この周辺には、国・県・町指定文化財をはじめ、いくつもの歴史的遺産が残る地域であることは、神積寺の往時を忍ばせ神積寺の存在を強く印象づけてくれます。

この度、加治谷区のフロヤ池改修事業に伴い調査を行いました。調査区の制約と限られた遺構・遺物の中から何を語るができるのかということもありますが、少なくとも文献以外では神積寺創建時に近い時期のものが断片ではありますが得られたことは意義があり、そこから昔の神積寺を垣間見ることが可能ならば幸いです。

最後になりましたが、この調査に際し、ご協力並びにご指導頂いた関係機関と関係者の方々には厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

福 崎 町 教 育 委 員 会
福崎町教育長 吉 識 正 明

本文目次

あいさつ

例言

第1章

第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	4
第3節	妙徳山神積寺	6

第2章

第1節	調査に至る経緯	11
第2節	調査方法	13
第3節	遺構	13
第4節	遺物	15
第5節	出土瓦について	19

第3章

第1節	まとめ	21
-----	-----	----

写真目次

写1	大門遺跡出土の旧石器	4
写2	西光寺採集の有舌尖頭器	4
写3	西大貫遺跡出土の縄文土器	4
写4	大門岡ノ下遺跡出土の弥生土器	4
写5	上大明寺遺跡出土のガラス玉	4
写6	妙徳山古墳の横穴式石室	5
写7	加治谷藪下五反畑遺跡の古墳時代の竪穴住居	5
写8	同 掘立柱建物	5
写9	石造宝塔残欠	7
写10	有井堂	7

写 11	神積寺本堂	7
写 12	神積寺奥院（開山堂）	7
写 13	石造五重塔	8
写 14	石造板碑	8
写 15	石灯籠	8
写 16	追儺式	9

挿図目次

図 1	福崎町位置図	1
図 2	妙徳山周辺植生図（里山林整備時作成のものを再トレース）	1
図 3	主要遺跡分布図	3
図 4	院配置図（寛政絵図より作成）	10
図 5	仮設道配置図	11
図 6	土取り場配置図	12
図 7	トレンチ位置図	13
図 8	遺構図	14
図 9	遺構図	14
図 10	石造物残欠	15
図 11	A区SD01出土遺物（平瓦）	15
図 12	A区SD01出土遺物	18
図 13	A区・C区出土遺物	17
図 14	平瓦模式図	19
図 15	端部分類図	19

図版目次

カラー図版 神積寺遠景（平成6年度時、国際航業株式会社提供）

- 図版 1 妙徳山神積寺遺跡
 上 神積寺遺跡遠景
 下 神積寺遺跡より加治谷集落を望む
- 図版 2 上 A区調査前状況
 下 B区調査前状況

図版3	上	C区調査前状況
	下	作業風景
図版4	上	A区SD01検出状況
	中	A区SD02検出状況
	下	A区通路03検出状況
図版5	上	A区SD01完掘状況
	中	A区SD02完掘状況
	下	A区通路03完掘状況
図版6		A区遺物出土状況
	上	SD01
	下	通路03、五輪塔残欠
図版7	上	B区完掘状況
	下	C区完掘状況
図版8	上	A区 五輪塔残欠
	下	仮設道 宝篋印塔残欠
図版9		A区SD01出土遺物（平瓦）
図版10	上	A区SD01出土遺物（丸瓦）
	下	A区SD01出土遺物（平瓦・道具瓦）
図版11	上	A区SD02、03出土遺物
	下	A区SD01、03出土遺物
図版12		C区出土遺物

表目次

表1	平瓦一覧表	20
表2	遺物観察表	22

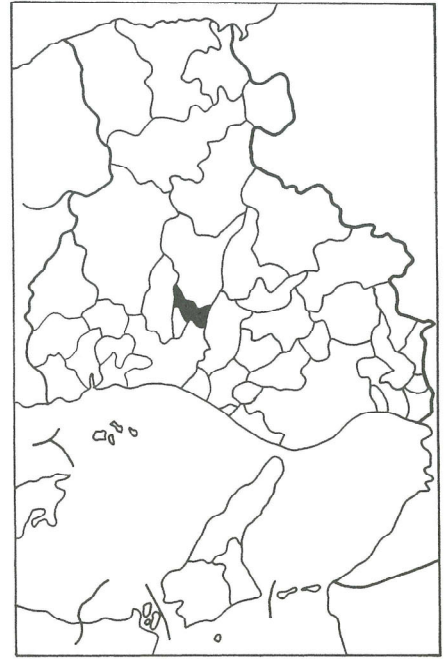


図1 福島町位置図

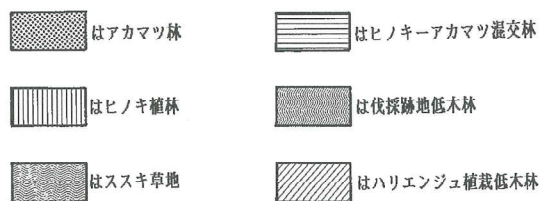
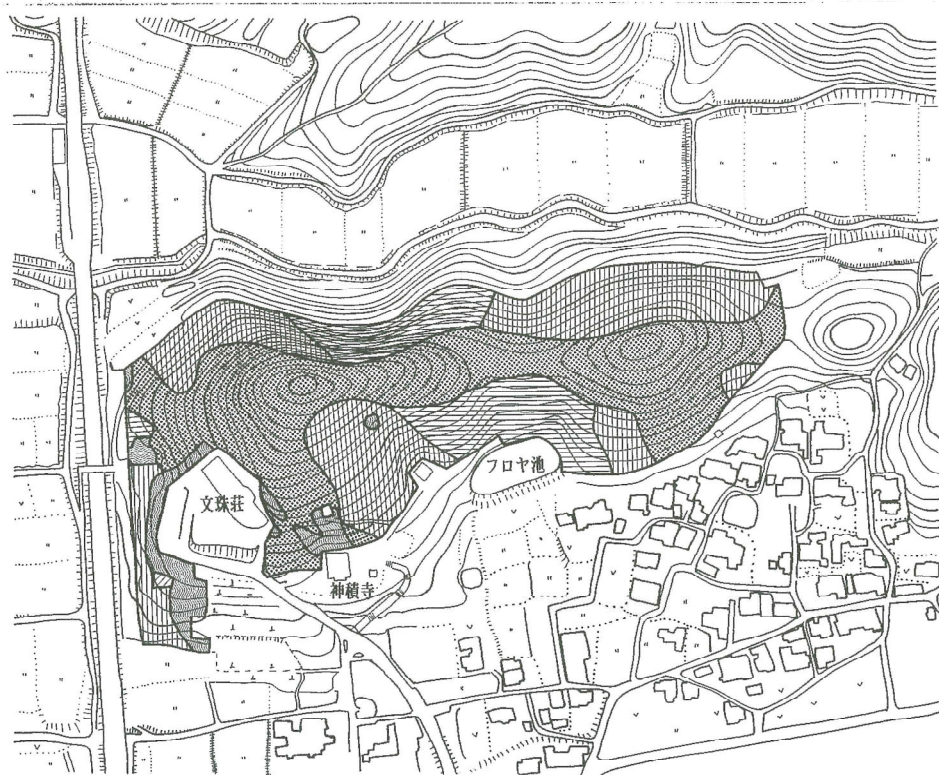


図2 妙徳山周辺植生図(里山林整備時のものを再トレース)

第1章

第1節 地理的環境

福崎町は面積が45.82km²あり人口が約2万人の町である。中国縦貫道と播但道の交差点にあたり福崎インターチェンジが存在することからもわかるように道路交通網の要衝地として近年都市化が著しく進んでいる。最近では播但道が接続する山陽道の全線開通により利便性が一層向上している。これにともない店舗建設が顕著となり、自動車輸送を見越した形で町の東西に工業団地も造成されている。

自然環境では都市化が進行しながらも平野部には水田地帯が広がり主要河川や溜池が灌漑用に主に活用されている。その中で市川は町を東西に2分割する形で南流し瀬戸内海へと流れ込む。それに流れ込む形で2級河川雲津川が西流し、谷底平野を形成している。南北には標高412mをはかる日光寺山から派生する山地帯で構成され、この北側の山地帯の西端は標高138.5mの妙徳山になる。この地質は丹波帯に属する加西層群A層からなり、前面(南・西面)には段丘地形が広がる。(1)

福崎町で忘れてならないのが断層であるが主要断層としては山崎断層(安富断層)が知られ、他にも谷底平野には推定断層が走るとされている。今回の調査区近くの加治谷集落の谷部分にも推定断層が走るとされているが詳細は不明である。

妙徳山周辺の現在の植生状況はアカマツ林を中心に周辺をヒノキの植林やヒノキ・アカマツ混交林が広がる形となっている。(2) (図2) 特に注目されるのはフロヤ池から兵庫県版レッドデータブックにCランクとして記載されているナガエミクリが存在している。(3)

- (1) 田中眞吾「福崎町とその周辺の自然に関する資料」『福崎町史』第三巻資料編I 1990年 福崎町
- (2) 栗林実『里山林整備事業基本計画について』1998年10月(社)兵庫県森と緑の公社
- (3) 兵庫県保健環境部『兵庫の貴重な自然—兵庫県版レッドデータブック』1995年3月兵庫県

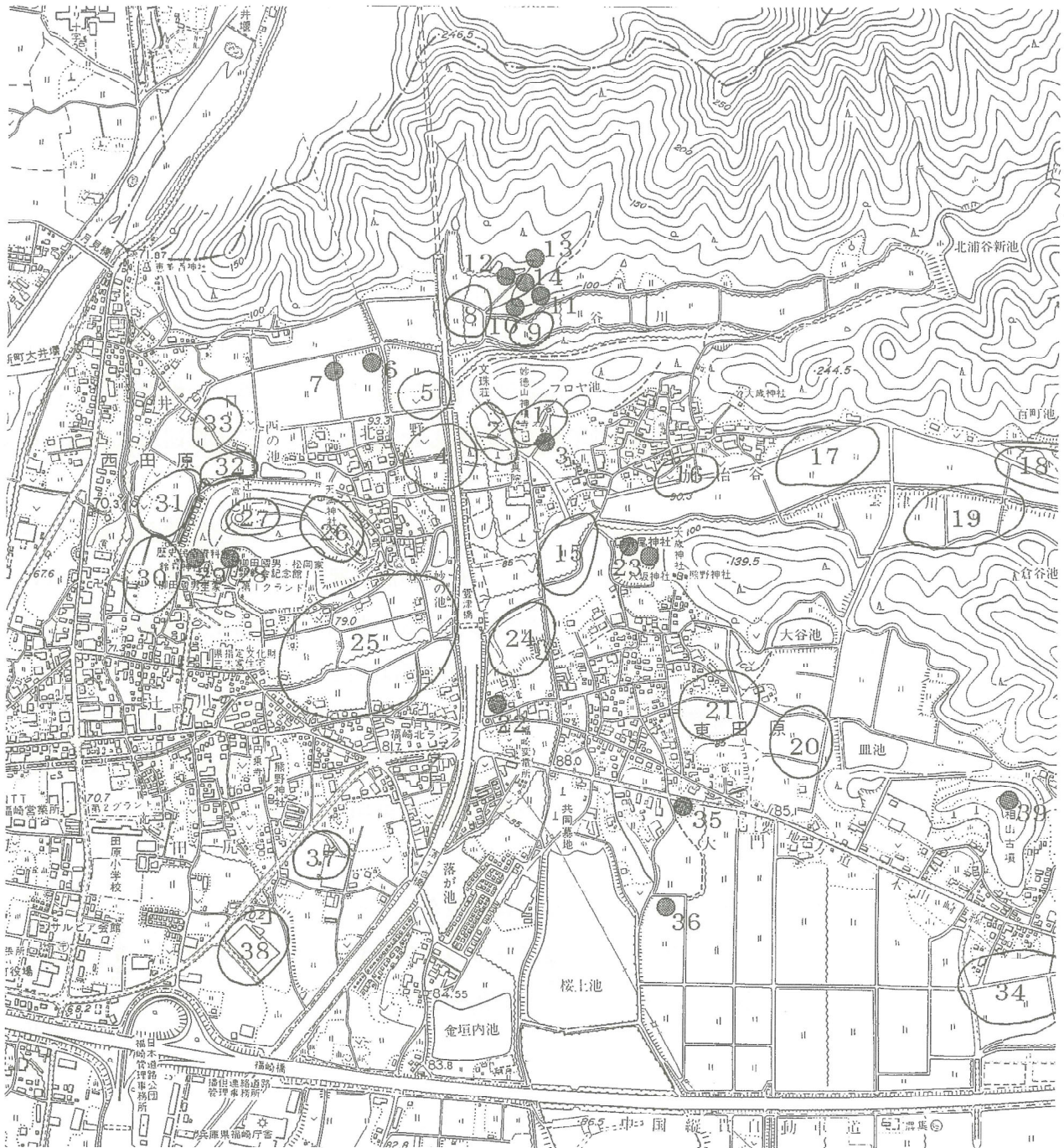
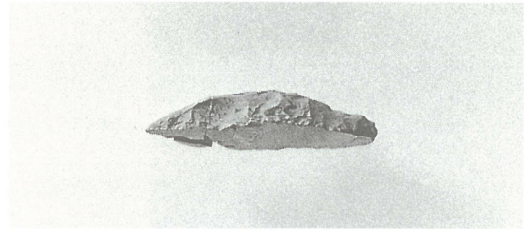


図3 主要遺跡分布図

- | | | | |
|-----------------|--------------------|------------------|--------------|
| 1. 妙徳山神積寺遺跡 | 2. 妙徳山遺跡 | 3. 妙徳山古墳 | 4. 北野寺西遺跡 |
| 5. 北野寺山西遺跡 | 6. 東新田古墳(ツブレ塚) | 7. 東広畑古墳 | 8. 西田原穴口遺跡 |
| 9. 嶽ノ下遺跡 | 10. 嶽ノ下古窯 | 11～13. 大畑古墳 | 14. 池ノ谷中池遺跡 |
| 15. 加治谷藪下・五反畑遺跡 | 16. 加治谷前田遺跡 | 17. 加治谷越前遺跡 | 18. 加治谷垣ノ内遺跡 |
| 19. 加治谷大垣内遺跡 | 20. 大門遺跡(血池ノ下地区) | 21. 大門遺跡(池田地区) | 22. 石棺仏 |
| 23. ビワクビ古墳群 | 24. 大門岡ノ下遺跡 | 25. 北野散布地 | 26. 北広岡遺跡 |
| 27. 西広岡遺跡 | 28. 歴史民俗資料館(石棺所在地) | 29. 宮山遺跡(土器棺出土地) | 30. 下大明寺遺跡 |
| 31. 上大明寺遺跡 | 32. 上大明寺遺跡 | 33. 西広畑遺跡 | 34. 西大貫遺跡 |
| 35. 池ノ下古墳(消滅) | 36. 旧石器採集地 | 37. 西田原上野田遺跡 | 38. 西田原前田遺跡 |
| 39. 相山古墳 | | | |

第2節 歴史的環境

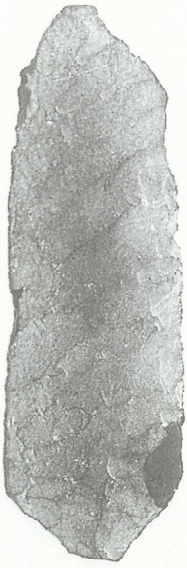
福崎町で旧石器時代に属する石器は散発的ではあるが見つかっている。当初、大門散布地より採集された剥片が知られているのみであったが、(4) 圃場整備に伴う調査の進展により田原地区では大門遺跡(池田地区) (5)



(写1) 大門遺跡出土の旧石器

から角錐状石器(写1)が西広畑遺跡からはナイフ形石器(6)が、南田原桶川遺跡からナイフ形石器がそれぞれ出土した。遺構やブロック単位のみまはみられず散発的な出土にとどまっている。

縄文時代のものとしては有舌尖頭器が西光寺地区から採集されており、(7) 神崎郡内初の発見例となった。(写2) 縄文土器の出土からみた遺跡の増加は顕著なものがあり、前期の西大貫遺跡(写3)、加治谷大垣内遺跡、後期の西田原穴田遺跡、加治谷藪下五反畑遺跡があげられる。(8) 晩期は堅穴住居内から石棒が出土した大門岡ノ下遺跡がある。(9) 縄文時代の遺構としては溝状遺構や土坑等があげられ、堅穴住居といった顕著な遺構はあまりみられない。

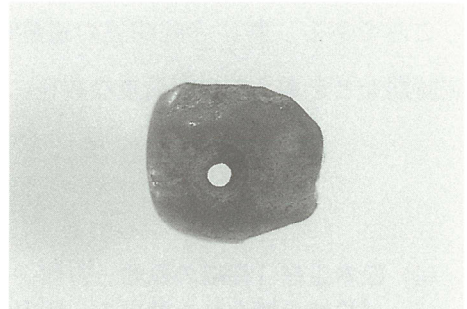


(写2) 西光寺採集の有舌尖頭器

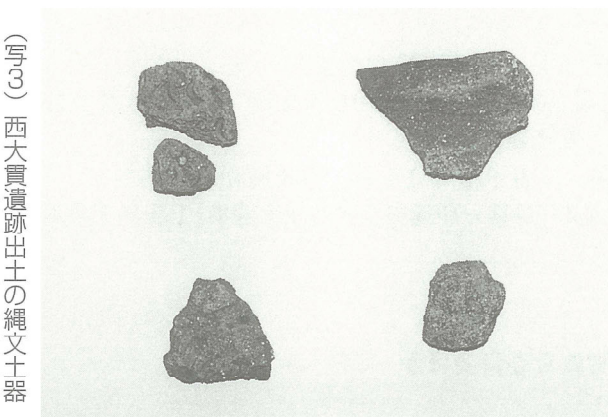
その他のものとしては八千種地区の古屋敷遺跡、北挾遺跡、春日遺跡から見つかった後期に属すると考えられる落とし穴がある。(10)

弥生時代前期の遺跡はいまだ確認されていないが、中期前半の遺物が大門岡ノ下遺跡から出土している。(11) (写4) それ以降の中期後半の遺跡は周辺で増加傾向にある。遺跡名として加治谷前田遺跡、同越前遺跡、同大垣内遺跡、

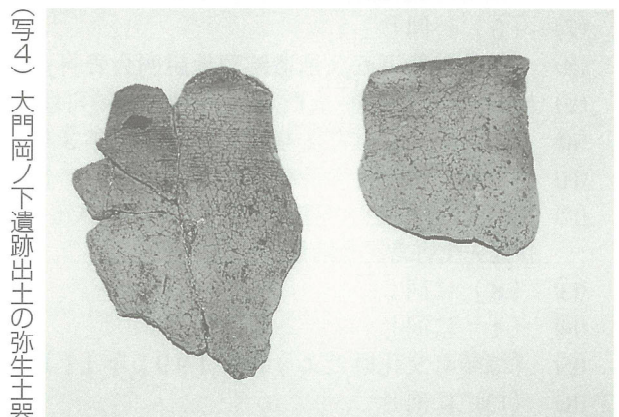
北野寺西遺跡、西広畑遺跡、上大明寺遺跡等があげられ、いずれも堅穴住居を伴う、その中で西広畑遺跡、上大明寺遺跡以外は中期で終わる遺跡ということがいえる。上大明寺遺跡からは中期の堅穴住居の中からガラス玉が出土した。(12) (写5)



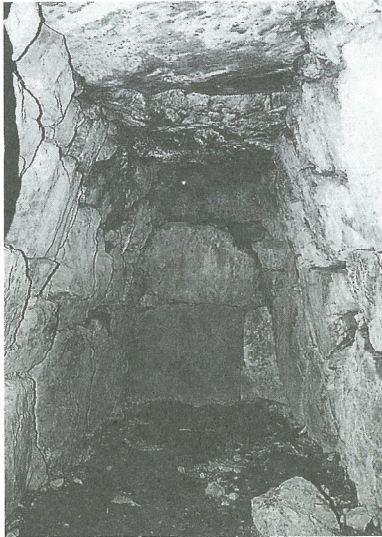
(写5) 上大明寺遺跡出土のガラス玉



(写3) 西大貫遺跡出土の縄文土器



(写4) 大門岡ノ下遺跡出土の弥生土器



(写6) 妙徳山古墳の横穴式石室

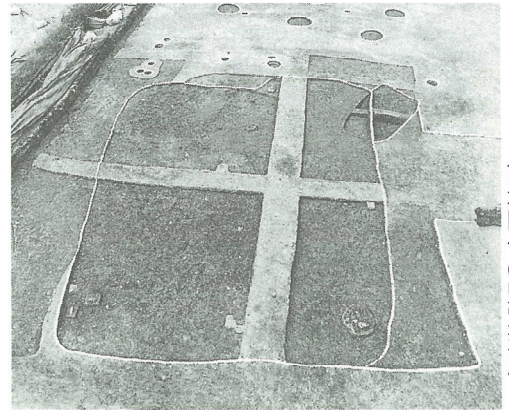
古墳時代の遺跡としては本町では古墳のみが知られていたが、最近になって集落跡も確認されるようになった。(13)古墳は調査区周辺では全長12.4mの横穴式石室を有する妙徳山古墳(写6)やビワクビ古墳群、大畑古墳群がみられる。(14)また、妙徳山遺跡からは箱式石棺が発見され古墳時代のものと考えられている。(15)

集落は加治谷垣ノ内遺跡や藪下五反畑遺跡から遺構が確認され、特に後者では方形の竪穴住居にカマドを伴うもの1棟を含む3棟の住居跡がみられ、(写7)その他に2×3間の掘立柱建物が3棟以上確認された。

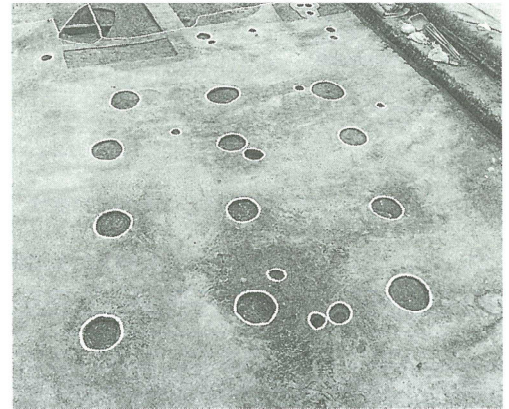
(写8)この集落は妙徳山古墳と時期的にも同じくらいであり何等かの形で関連する集落と考えられる。(16)

奈良時代以降では遺物が散見されるものの明瞭な遺構は調査区周辺では確認されなかった。ただ、嶽ノ下遺跡からは窯に伴う遺物の出土があり八千種地区以外にも窯跡の存在が示唆された。また、平安時代の掘立柱建物が藪下五反畑遺跡から見つかり神積寺との関連が注目される。

続く中世以降の遺跡は周辺からはほとんどすべての遺跡にみられ密度の濃さを示している。北野寺西遺跡からは方形の竪穴住居が見つかったが、主となるものは掘立柱建物である。中世から近世にかけての遺跡は妙徳山神積寺ぬきには考えられないものであり検討を要するところである。特に寺院関連の遺跡により寺の範囲や衰退時期などを考える上で貴重な存在になると考えられる。



(写7) 加治谷藪下五反畑遺跡の古墳時代の竪穴式住居



(写8) 同 掘立柱建物

- (4) 松本正信「福崎の原始・古代・中世資料」『福崎町史』第三巻資料編Ⅰ 1990年 福崎町
- (5) 『福崎の埋もれた歴史Ⅰ～田原地区～』1998年11月 町立神崎郡歴史民俗資料館
- (6) 『福崎町文化財だより⑦』1994年9月 福崎町教育委員会ほか
- (7) (5)に同じ
- (8) 『加治谷藪下五反畑遺跡現地説明会資料』1997年8月 福崎町教育委員会
- (9) 出田直『大門遺跡・大門岡ノ下遺跡』福崎町埋蔵文化財調査概要報告1 1993年3月 福崎町教育委員会
- (10) 『福崎町文化財だより⑩』1998年3月 福崎町教育委員会ほか
- (11) 出田直「福崎町の弥生遺跡」『かたりべ』第13集 1993年11月 福崎町かたりべ会
- (12) 出田直「播磨出土の弥生中期後半のガラス玉の一例」『古文化論叢－伊達先生古希記念論集』1997年4月 伊達先生古希記念論集刊行会
- (13) (8)に同じ
- (14) (4)に同じ
- (15) 『福崎町文化財だより⑯』1997年11月 福崎町教育委員会ほか
- (16) (13)に同じ

第3節 妙徳山神積寺

福崎町東田原（加治谷地区）所在の天台宗の古刹妙徳山神積寺は正暦二年（991）に慶芳内供によって創建されたと伝えられている。

そのことは室町時代の貞和四年（1348）頃の成立と考えられる『峯相記』に神積寺のことが記されている。以下それを神榮赴郷『峰相記の研究』より引用すると（17）

原文

次妙徳寺者 大納言範郷ノ息慶芳内供最初ノ建立 一條三條兩帝御願所也 彼内供西国巡礼ノ次 正暦二年三月八日当国田原ノ庄有井村ニ一宿 夢ノ内ニ貴僧一人出来リ枕ニ立テ告ケテ云此東ノ山ノ下ハ仏法繁昌ノ地 四神相応ノ砌ナルヘシ 汝ヲ待テ今ニ興セス 早ク寺ヲ立テ薬師如来ヲ安置スヘシ 我ハ是薬師如来ノ応花妙徳菩薩也云々 霊夢ニ驚テ尋見ルニ実ニ殊勝ノ霊地也 仍伽藍ヲ建立ス 彼ノ範郷ノ妻妾兩帝ノ御乳母ナルニ依テ彼御願ニ申成ス 多宝ノ塔ハ讃州ノ上貢ヲ以テ三條院ノ御建立 常行堂ハ土州ノ乃貢ニテ一條院ノ御願也 三條院第七宮覚照阿闍梨内供ノ弟子トシテ当寺寺務始行ス 仍國中彼勸進ニ與シ上下彼ノ願意ニ随テ堂舎仏閣 興行シ天台ノ碩オヲ招テ法花一乗ノ義理ヲ談シ又密教ヲ勤修ス 爰ニ延慶二年八月五日不慮ノ炎上出来テ金堂 講堂 鐘樓 経蔵焼畢 寺僧等諸方ヲ勸進シ随分ノ力ヲ尽シテ本ノ如クニ二堂造営畢

通釈

次に、妙徳寺（神積寺）は大納言藤原範郷の息男・慶芳内供が建立した寺で、一條、三條両天皇の御願所である。慶芳内供が西国を巡礼された際、正暦二年（991）三月八日に播磨国神東郡田原庄有井村で一泊された。その夜、夢のなかに一人の貴僧があらわれ枕元に立ってこう云われた。「この東の山麓は仏法が栄えるのにふさわしい場所である。私はお前が来るのを待っていた。早くあそこに寺を立て薬師如来を安置してまつことだ。私自身が薬師如来の仮の姿、妙徳菩薩なるぞ・・・」と。夢からさめて慶芳は、さっそくお告げにあった東の山麓を尋ねて行ってみると、そこはまさに仏法繁昌に好適の霊地であった。そこで、慶芳内供は寺院を建て薬師如来をまつた。慶芳内供の妻妾が一條、三條両天皇の乳母だったことから当寺は御願所となり、三條院は讃岐国からの田租でもって多宝塔を建立され、また一條院は土佐国からの租税で常行堂を建立されたのである。また、三條院の第七子、覚照阿闍梨が慶芳内供の弟子として当寺の寺務をとられた。そして、国中に当寺の堂舎を整備するについての財物の寄付を求めると、上下のへだてなく浄財は集り、仏閣の偉容も成って、比叡山から天台宗の学僧を招き法華經に説かれている教法が他の經典の説よりすぐれているわけを討論したり、密教について研究したのであった。しかしながら、鎌倉時代の延慶二年（1309）八月五日思いがけない火事のため、金堂、講堂、鐘樓、経蔵は焼けてしまった。寺僧らは再建のために随分力を尽くして、金堂と講堂を造営した。

（一部改変）



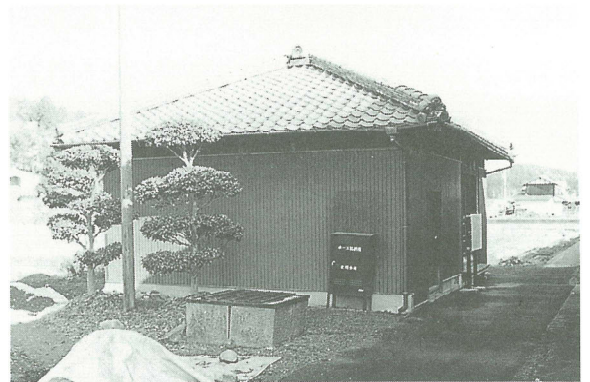
(写9) 石造宝塔残欠

ここから、神積寺は正暦二年（991）に慶芳内供によって建立され、寺の呼び名も「妙徳寺」と呼ばれていたことがわかる。この妙徳寺という名称は正応四年（1291）八月の「田原莊実検注進状」の中に「妙徳寺」とみえ、（18）県下の石造遺物で最古級の紀年銘暦仁二年（1239）をもつ石造仏滅記念塔にも「妙徳寺」とみえる。（19）（写9）さらに保延四年（1138）の資料の中に「妙徳寺住僧玄真」の名が見えることから平安時代の終わり頃に妙徳寺と呼ばれていたことがうかがえる。（20）

この神積寺創建の際の逸話で、「播磨国神東郡田原庄有井村」で一泊し夢枕でお告げを聞いた場所是有井堂（有井寺）と考えられている。この堂の名も「田原莊実検注進状」の中に里寺十三ヶ寺の一つ「有井寺」としてみえる。後世建て替えられたと思われるが、存在したと思われる場所に今も有井堂がある。（21）（写10）

この神積寺は伽藍が整い隆盛を極めたものの延慶二年（1309）に焼失してしまうとされる。

本堂はその後、再建されたと伝えられ、現在の本堂は寺伝によれば天正十五年（1587）に建立されたと伝えられている。正面5間、側面6間（現在は7間）で、正面に1間の向拝をつけ、本瓦葺きで入母屋である。屋根の葺き替えの記録として新しいもので昭和七年（1932）改修の刻印のある瓦があることからそれが最も新しいと思われる。（22）身舎の軸組まわりには当初の姿を残すと考えられるが、後世の修理による部分が多くみられるようである。しかし、伝統的手法がうかがえる部分より16世紀後半の密教本堂として貴重なものと考えられている。（23）（写11）



(写10) 有井堂

本堂を東側に行くと奥院（開山堂）にたどりつく（24）、正面3間、側面3間半で屋根は本瓦葺き、宝形造りとし、正面に切目縁をつける。建立は不詳であるが、木鼻、実肘木等の手法から17世紀後半頃と考えられている。（25）（写12）

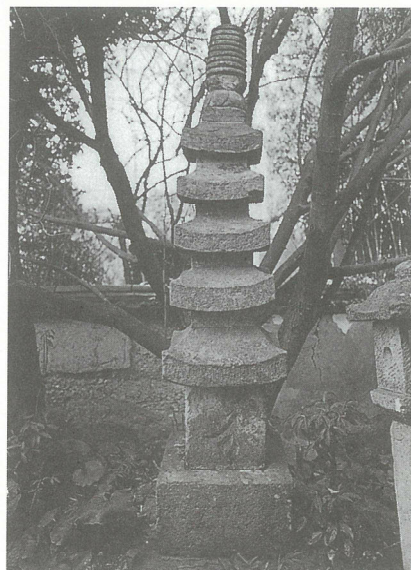


(写11) 神積寺 本堂



(写12) 神積寺奥院（開山堂）

建造物以外に神積寺周辺には主要な文化財がみられる。慶芳内供の墓と伝えられる石造五重塔が神積寺の西方丘上にあり、鎌倉時代中期頃のものと考えられている。流紋岩質凝灰岩製で総高241.4cmをはかり、軸部の1面は素面だが他の3面は種子を刻む。(兵庫県指定文化財)(写13)(26) 本堂正面の崖面下に立つ石造板碑は流紋岩質凝灰岩製で板碑の形状を呈している。正面に大きく薬研彫りで阿弥陀の種子を刻み、下部には1行4字12行の銘文を彫っている。内容からすると後堀河天皇の皇后安喜門院の百か日供養塔で弘安九年九月十五日(1286)の造立ということがわかる。(兵庫県指定文化財)(27)(写14)



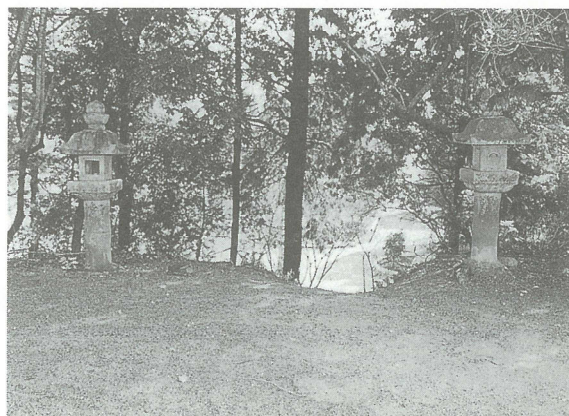
(写13) 石造五重塔

本堂正面には、天和三年(1683)に神東郡北山田村の助左衛門が両親の菩提を弔うために奉納した石灯籠が一对存在する。(福崎町指定文化財)(28)(写15)

七堂伽藍と52の院を有するまでにおおきくなった神積寺も現在では「悟真院」があり「本寿院」の名残をのこすのみとなっている。寛政三年二月(1791)の神積寺境内絵図には先の2院の他に「文殊院」「無量寿院」「金福院」の名がみえる。明治四年(1871)の絵図にも同様の院の存在が記されている。(29)(図4) その他の院については名称及び所在地を示すものもみられず、定かではないが神積寺周辺の発掘調査の成果によって近世の建物跡の存在や敷地の存在が考えられる場所が見つかっている。それらから考えると、現在の寺の西側部分にかけて神積寺関連の遺跡が広がると考えられた。(30)



(写14) 石造板碑



(写15) 石灯籠



(写16) 追儼式

神積寺の年間行事の中で毎年1月15日にとりおこなわれる「追儼式(鬼追い)」は著名で、山の神、赤鬼、青鬼が本堂及び境内地で松明をもち舞を舞う。境内地では途中松明をなげるが、厄除け等の力があると考えられそれを奪い合う。(31) (写16)

神積寺の鎮守として建立された岩尾神社に文殊像がまつられており、文殊会式として賑わいをみせていた。(32) 現在は明治の神仏分離令以降に文殊像

が神積寺にまつられている。そのために毎年3月の春分の日には神積寺にて文殊会式がとりおこなわれている。

- (17) 神栄越郷『播磨の地誌 峰相記の研究』1984年
- (18) 中野栄夫「二 中世前期の福崎 4 中世社会の構造と播磨」『福崎町史』第一巻本文編 I 1994年3月 福崎町
- (19) 田岡香逸「仏滅紀年の新資料—神積寺悟真院蔵石造宝塔残欠—」『大和文化研究』48 1962年
- (20) 中野栄夫「一日頓写経と妙徳寺」『ふくさき史話』1995年1月 福崎町
- (21) (18) に同じ
- (22) 町道文珠荘線改修工事の際に瓦溜りが確認され中に刻印を有する瓦類が認められた。その中に「昭和七年改修」と刻印された瓦が含まれていた。
- (23) 神戸佳文「神積寺」『兵庫県大百科事典』上 1983年10月 神戸新聞出版センター
- (24) 寛政三年の絵図に開山堂の名で記されている。
- (25) (23) に同じ
- (26) 増田重信『石造遺品』福崎町の文化財第3集 1993年3月 福崎町教育委員会
- (27) 明山大華、藤沢一夫「後堀河帝皇后安喜門院の御尊観婆」『考古学』7-1・2 1936年
- (28) 大沢政雄『石造遺物の神崎郡誌』1993年11月 神戸新聞出版センター
- (29) 福永知美、藤原昭三『古地図・絵図に描かれた福崎』1996年11月福崎町教育委員会
- (30) 平成5年度(1993)北野寺西遺跡調査の際に17世紀初頭の遺物の出土がみられその頃に神積寺関連のものがあつたとみられる。
- (31) 棟広しげり「神積寺の鬼追い」『兵庫県の民俗芸能』—民俗芸能レッドデータブック—兵庫県民俗調査報告12 1997年3月 兵庫県教育委員会
- (32) 黒田辰夫ほか『絵馬』福崎町の文化財第2集 1985年3月 福崎町教育委員会
文殊会式の賑わいが絵馬「岩尾神社祭礼図」として残っており、江戸時代のもと考えられている。剥落が激しいが当時の状況を知ることのできる貴重なものである。

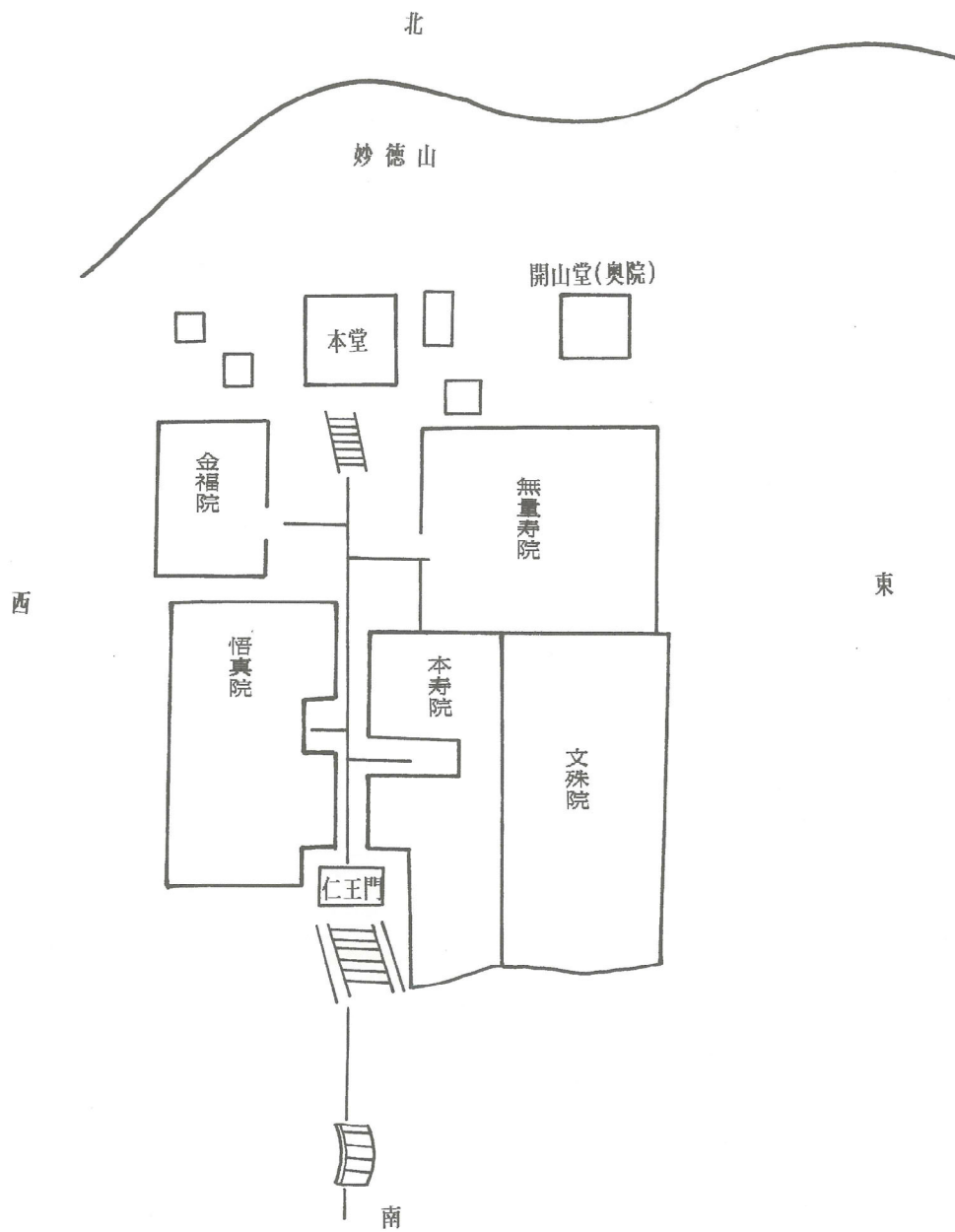


図4 院配置図 (寛政絵図より作成)

第2章

第1節 調査に至る経緯

福崎町東田原字妙徳山神積寺の東側に加治谷の「フロヤ池」があり、農業用水として利用されている。その堤の修理を行うために周辺を含めた改修工事が計画された。今回は進入道路を福崎町指定史跡「妙徳山古墳」の北に近接して設けられる計画があり合わせて取扱いを協議した。計画上、進入道路は仮設道と言う性格であり地面の養生を行い、最終的に現状復旧を行うということであるために、古墳に直接的な影響のない放線計画が取られるならば問題ないと判断された。(図5)

この部分に関しては妙徳山古墳の関係で法第57条の3関係書類が提出された。

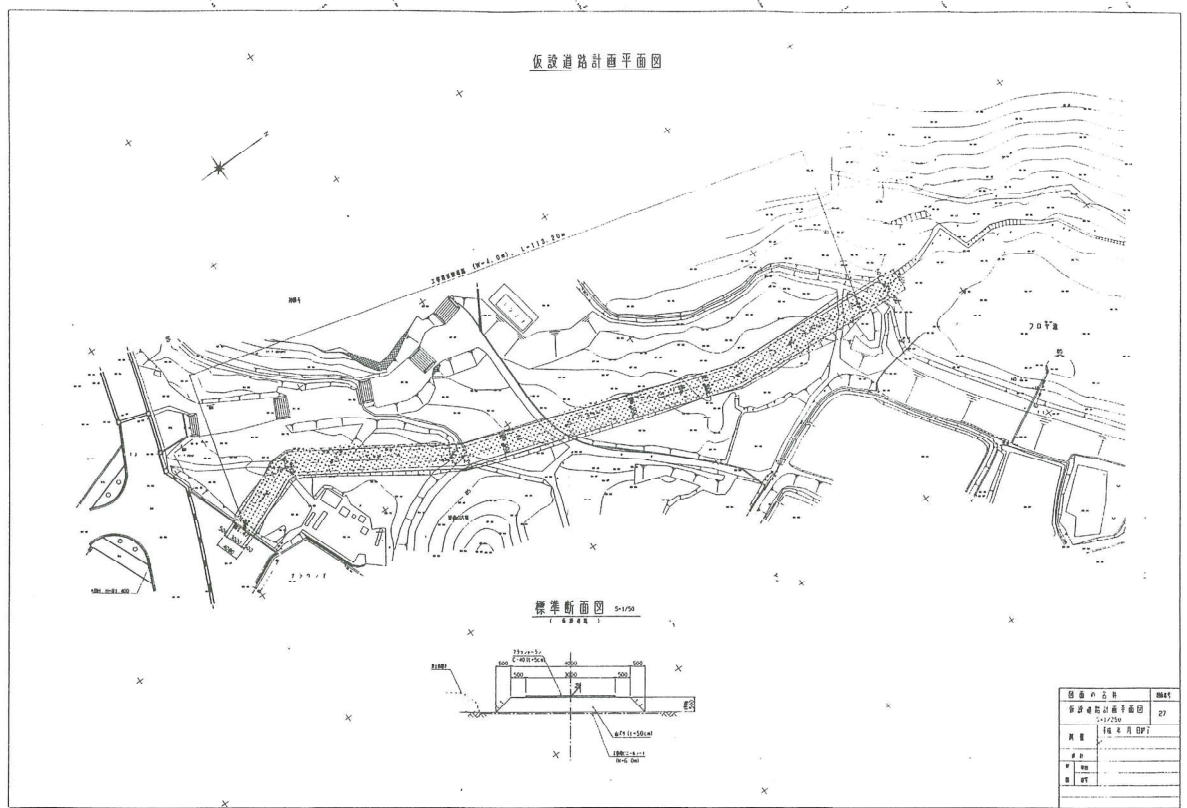


図5 仮設道配置図

奥院（開山堂）東側、フロヤ池の西端部分が池改修の際にはがね土を採掘する場所として位置付けられ全面的に掘削する計画がたてられた。（図6）この場所は過去も何等かの掘削が行われている部分があり著しい削平箇所がみられた。その部分を除く部分に奥院よりフロヤ池北側を通り妙徳山麓を沿う形で通路がみられる。地元の方も現在でも利用することのある通路ということであった。この通路はいつ頃から使用されたのかは定かではないが神積寺との関連性も考慮された。

その部分に関して確認調査を実施し、その結果、溝状遺構と瓦片の出土がみられた。その後、ここも法第57条の3が提出され、法第98条の2の書類を提出するなどして順次調査を行った。

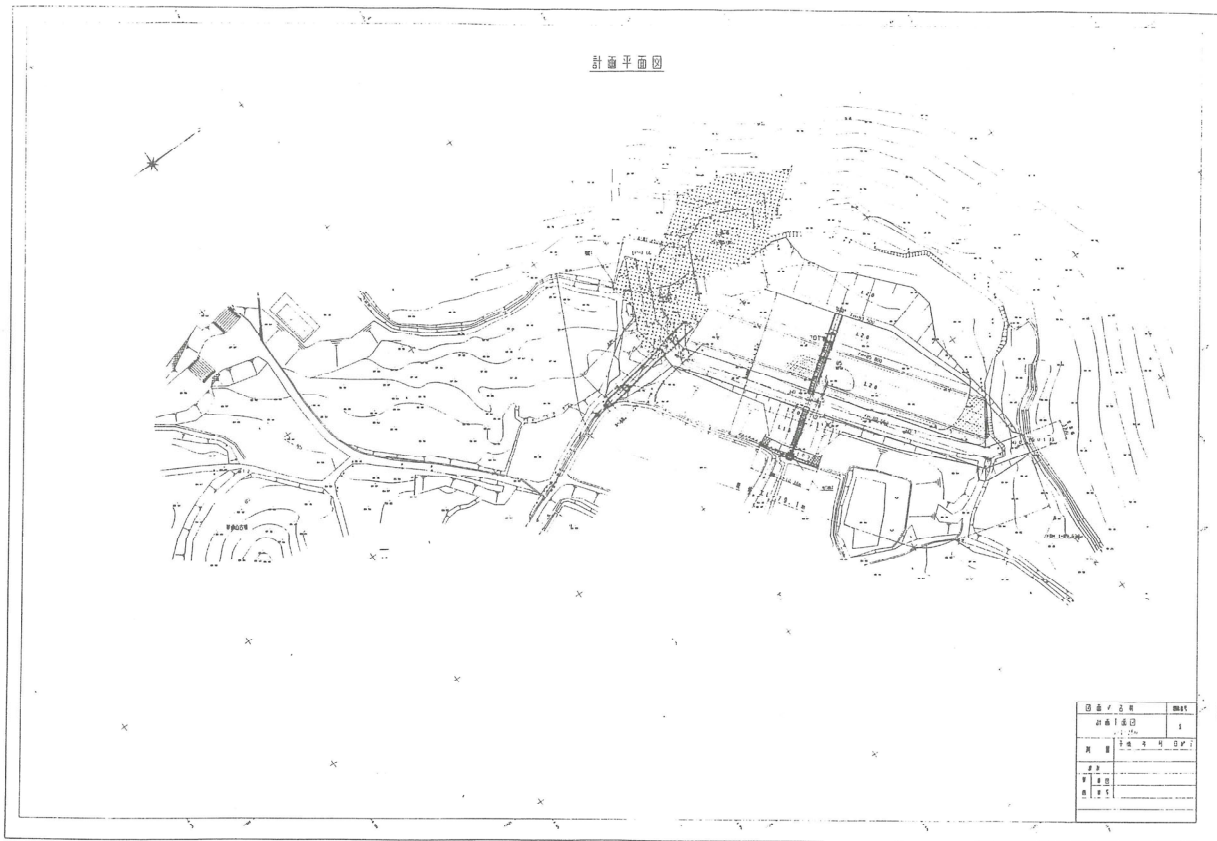


図6 土取り場配置図

第2節 調査方法

調査は場所の制約もあり重機は導入することは不可能であり、ほとんどを人力作業で行うこととした。おもな作業として表土面の除去と遺構精査及び掘削、さらに記録作成として平板測量等を実施した。地形図は工事に際して作成された既存のものを利用し調査区内は1/100のコンタ図(20センチ毎)を作成した。

調査区

削平地を除く地区にトレンチを設定した。山に沿って設けた部分とそこから池に向かって伸びるものを2本設定した。それぞれをA区B区C区と称し以下概要を記す。(図7)

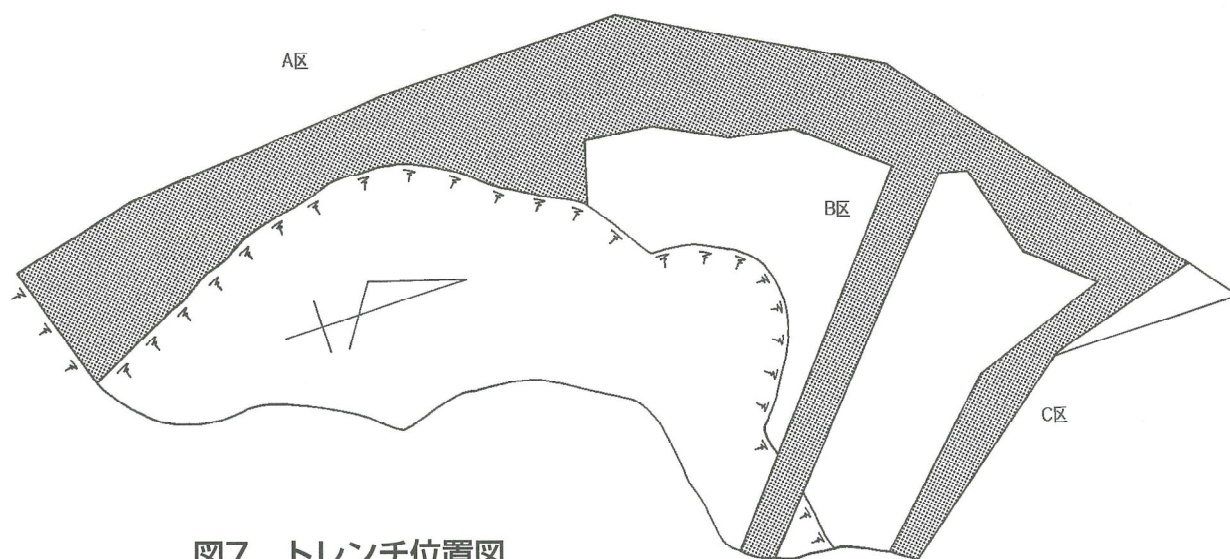


図7 トレンチ位置図

第3節 遺構(図8、9)

A 区

通路部分と溝状遺構が確認され、それぞれに瓦の出土がみられた。

通路部分は幅160cm深さ10~30cmをはかる。埋土は褐色土を呈しそこから瓦片が出土した。すべて細片である。溝状遺構はSD-1、同2とし、SD-2は幅50cm長さ110cmをはかり奥院方向に続く。SD-1は東西方向の部分と途中から南北方向へと走る部分にわかれる。幅60cmをはかり南北方向のものは途中で二股にわかれる。瓦片の出土がみられた。

B 区

A区から通じる通路の続きがみられる。A区のものとは溝状にくぼむのに対して、B区のものとは法面を掘削する形で形成した平坦面をもつ。ここでは幅130cmをはかる。

C 区

A・B区より通じる通路の続きがみられた。B区と同様の状況である。C区の東端（フロヤ池寄り）部分からは瓦片の出土がみられた。幅160cmをはかる。

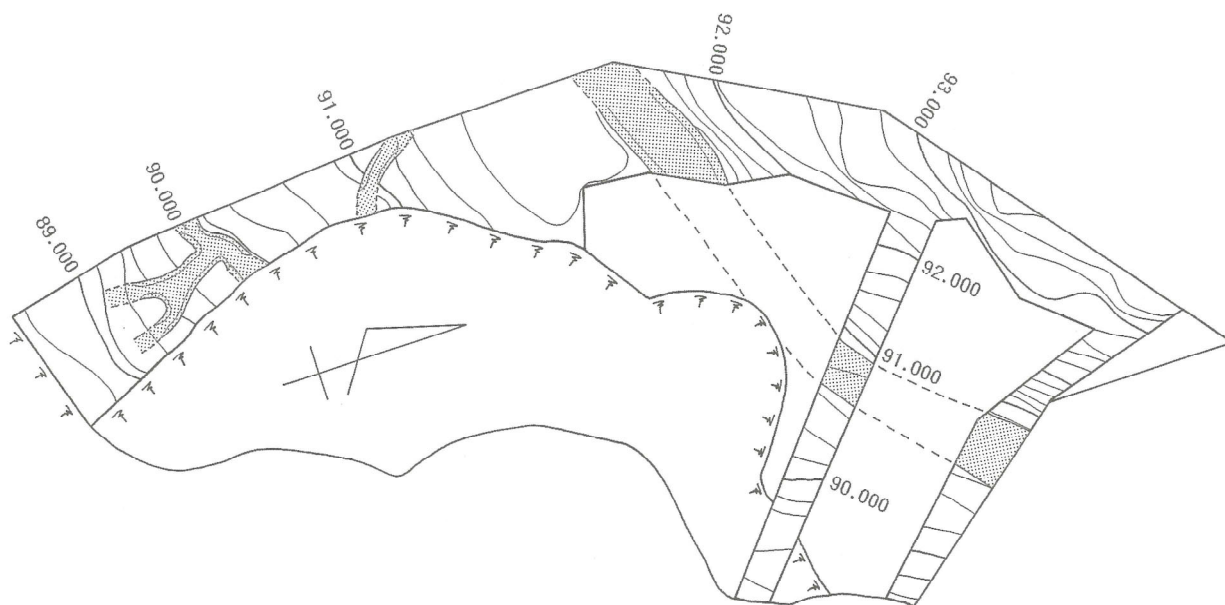


図8 遺構図

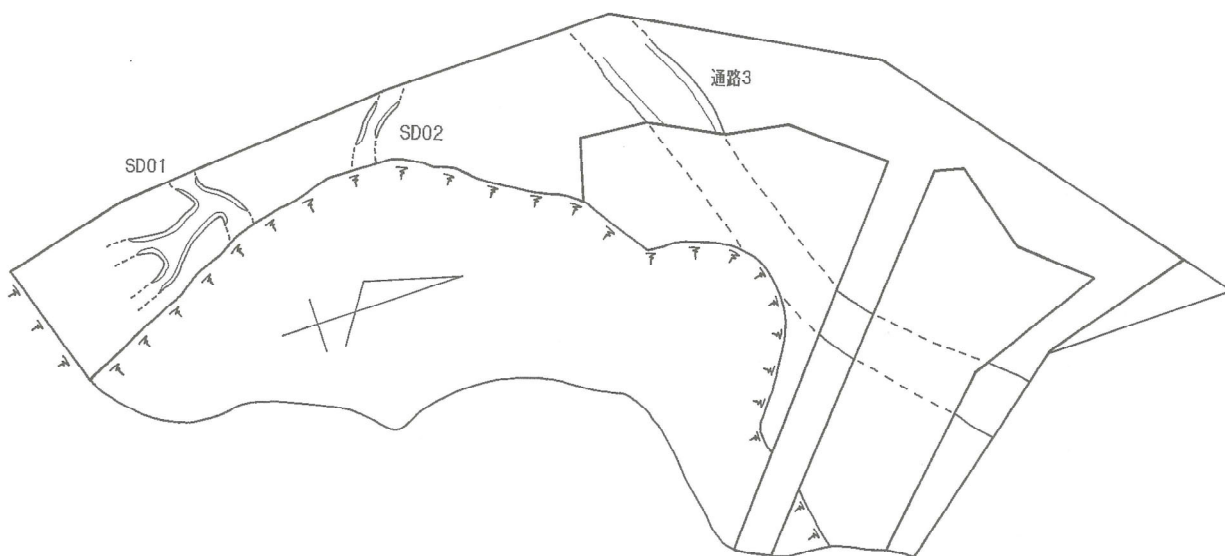


図9 遺構図

第4節 遺物 (図10、11、12、13)

瓦片の出土のみである。表採遺物として五輪塔残欠が1点と相輪がみられる。(図10) 主として平瓦で占められ丸瓦とその他の瓦(道具瓦)の出土もみられる。この中には瓦当はみられない。1点を除くほかは燻し瓦で占められる。燻し瓦の表面の色調は基本的に黒色で断面は灰色を呈する。胎土は密で1~3mm大の砂粒を含むものが多い。焼成は良好であるが一部燻しにむらのあるものもみられる(図12-9)

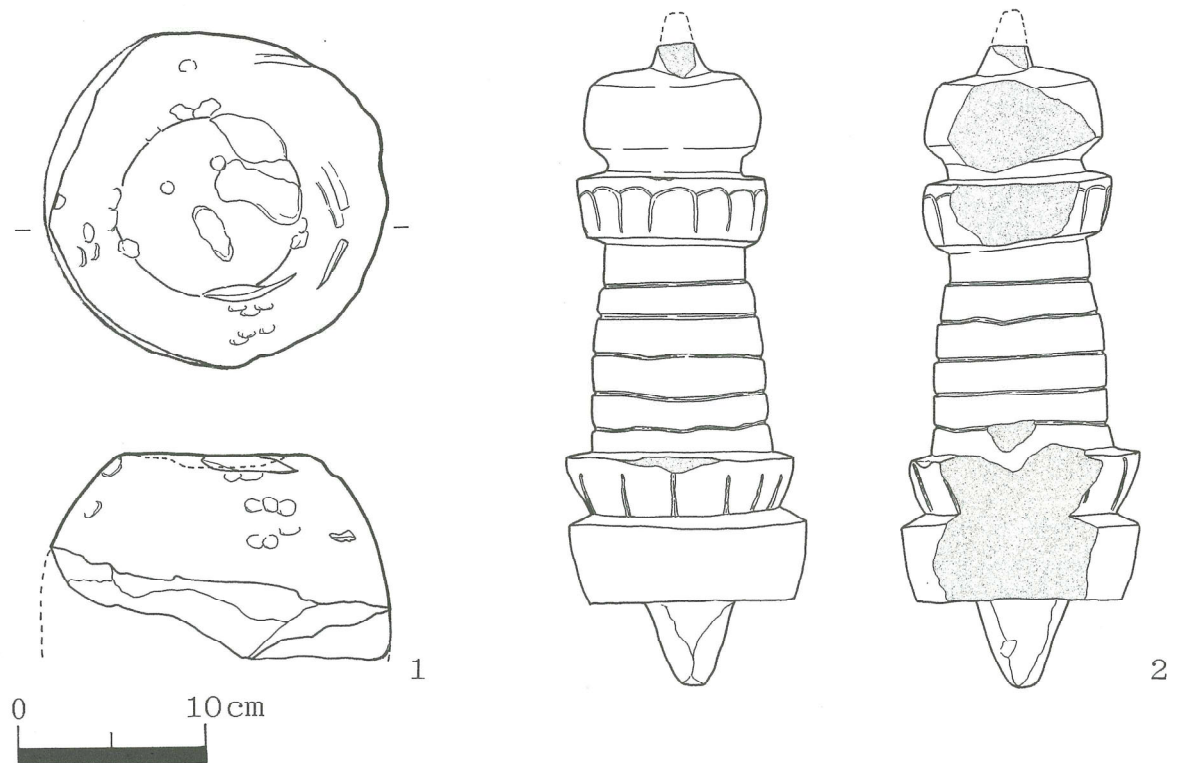


図10 石造物残欠

A 区

SD01 (図11、12)

平瓦10点、丸瓦4点、道具瓦1点出土している。平瓦のうち図11-3は凹面に布目痕があり、凸面には格子叩きを施す。色調は青灰色で焼成は堅緻で須恵質である。図12-5、8、9は平瓦で比較的残りのよいものは5のみである。5の凹面は丁寧なナデを施し凸面はハケメが残る。8の凹面は横位のナデ(ハケメ)がみられ凸面は縦位のハケメが残る。9は燻し状態が他のものと比較して粗く凸面で燻しが無い所もある。5、8、9共に凸面に離れ砂と考えられる砂粒の痕跡があり、ガラザ

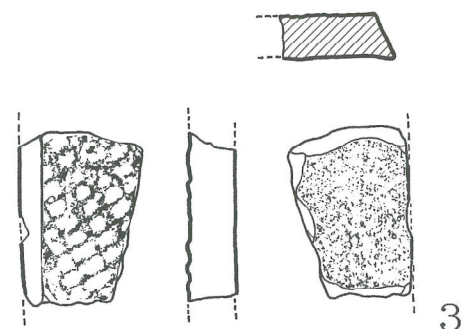


図11 A区SD01出土遺物(平瓦)

ラ感がある。図12-4、7は丸瓦で1は同一個体とはいえないが比較的類似したものをもって一つの丸瓦を復元した。凸面はケズリがみられ、凹面は布袋痕がみられる。端部は面取りが施される。7の凸面は丁寧な仕上がりを施し凹面は布袋痕と棒状の叩き痕がみられる。端部は面取りがみられる。6は道具瓦の一つと考えられる。凸面はケズリがみられるがミガキを施したように光沢を持つ。凹面はナデが施される。端部の一部に溝状の痕跡が残り粘土の貼り付け跡と考えられる。凹面の一部に赤色顔料の一部が見られる。

SD02 (図13)

平瓦が1点出土している。10は凹面は丁寧な仕上がりで凸面は離れ砂と考えられる砂粒がありザラザラ感がある。

通路03 (図13)

平瓦10点、丸瓦1点出土している。いずれも破片であり平、丸共にSD01、SD02出土の物と同様の感である。11の平瓦のA面(正面)に斜方向の叩き状痕跡が認められる。乾燥時に乾燥台状のものに乗せた際に付いた痕跡であろうか。これも凸面に離れ砂と考えられる砂粒が認められる。

C区 (図13)

平瓦1点、丸瓦1点、道具瓦1点出土している。12は丸瓦で凸面にケズリがあり凹められる。端部は他と同様に面取りがみられる。13は平瓦で他と同様の特徴を持つ。14は道具瓦と考えられる。直線から曲線におさまる部分があり1ヶ所には穴がみられる。1面にはユビナデと考えられる調整が顕著にみられる。

石造物残欠 (図10)

1は五輪塔残欠で火輪に該当するものと考えられる。最大幅は17.6cm最大厚10.8cmをはかるがいずれも残存部での計測である。上部は若干の窪みが認められ、下部は欠損が著しい。表面は加工の際についたと考えられる痕跡が若干認められる。石材は凝灰岩と考えられる。

調査区内では五輪塔残欠は他に見られなかったが、神積寺境内にはいくつかの残欠が存在するが本来の姿をとどめるのは皆無に等しい。しかし、その数からすればいくつかの五輪塔が存在したことが考えられ、これもその一部とすることができよう。これらの五輪塔は江戸期に作られたものが多く存在し、これもそれらの一群にあてはまるものと推される。

2は仮設道付近より採集の石造物残欠である。相輪部分と考えられ、宝篋印塔または層塔等に使用されるものであろうが、宝篋印塔残欠と考える方が妥当といえる。残存長34.4cmをはかる。相輪は宝珠上端を欠損し、その下に請花、九輪と続く。九輪部分は六層からなり省略化が見られる。その下の請花や上部の請花には線刻が見られるが、その表現も簡略化されている感が強い。最下部には伏鉢部分に差し込むと考えられる突起が見られ、三角錐状を呈する。

全体的には上端部の欠損が顕著に見られるが、正面に対して裏面と考えられる部分に剝離が見られ
 請花部分の欠損が認められる部位もある。

この石材は凝灰岩と考えられる。

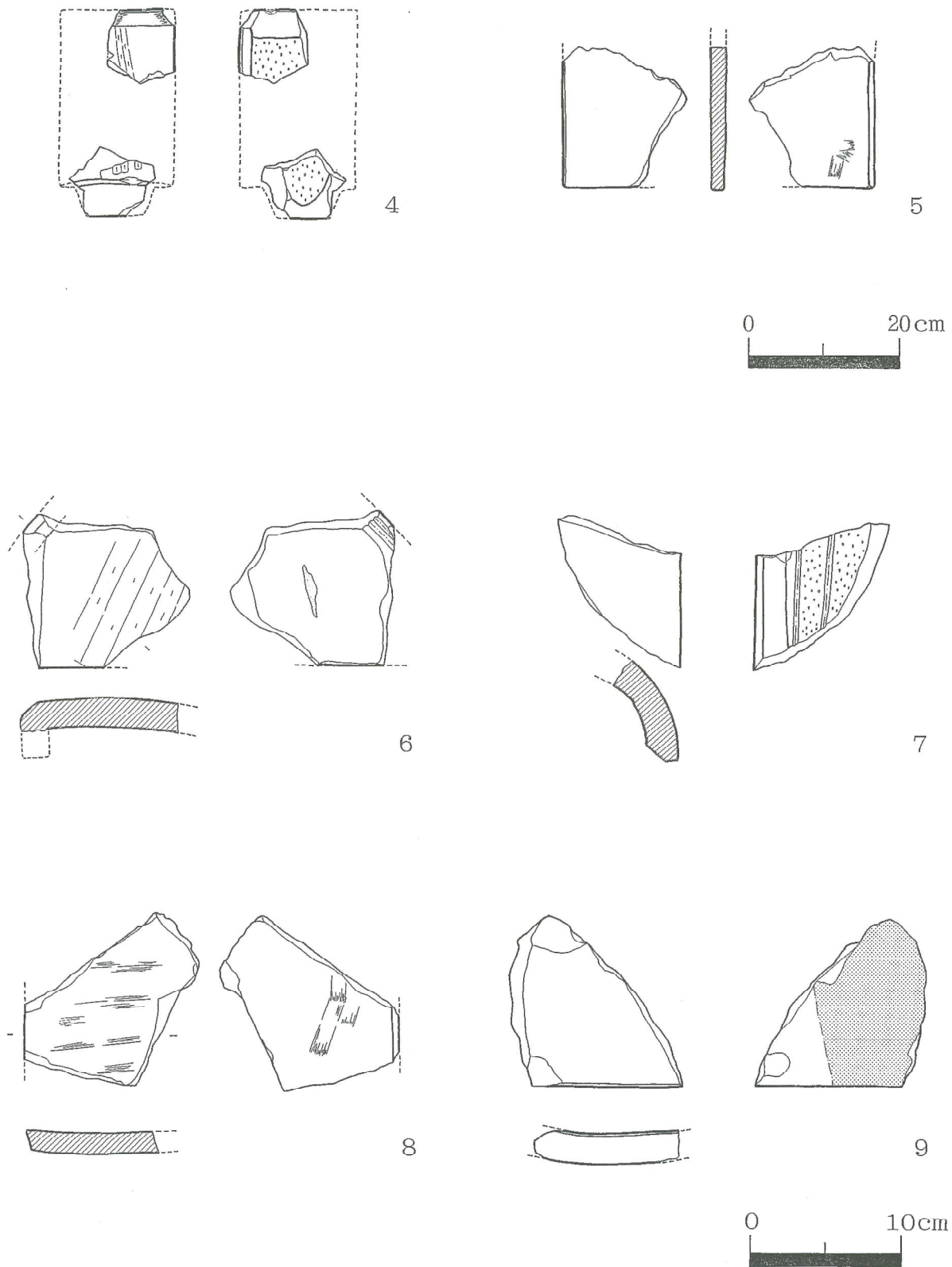
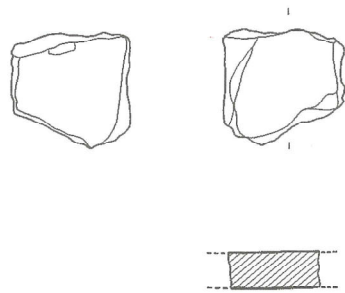
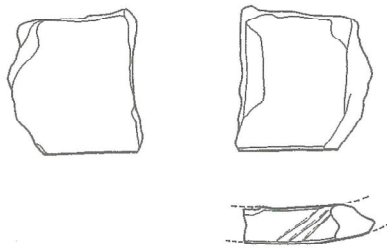


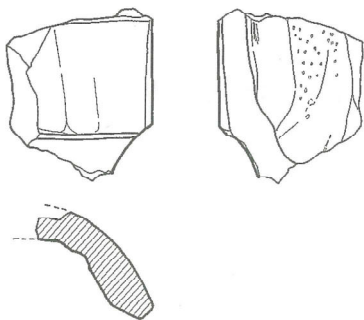
図12 A区SD01出土遺物



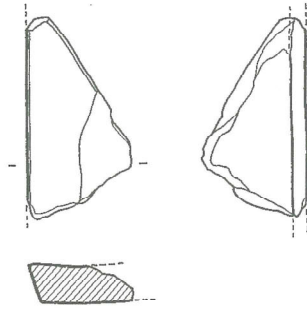
10



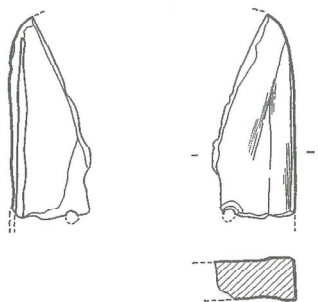
11



12



13



14



图13 A区·C区出土遺物
(10=A区SD02、11=A区通路03、12~14=C区)

第5節 出土瓦について

今回出土した瓦のうち平瓦について若干の検討を試みた。平瓦を図14の通り正面をA面、側面をB面とし、それぞれの面に対して面取り状況に応じてa、b、c、dの4類を設定した。(図15)さらにA面、B面の厚さも比較した。結果は一覧表の通りである。(表1)

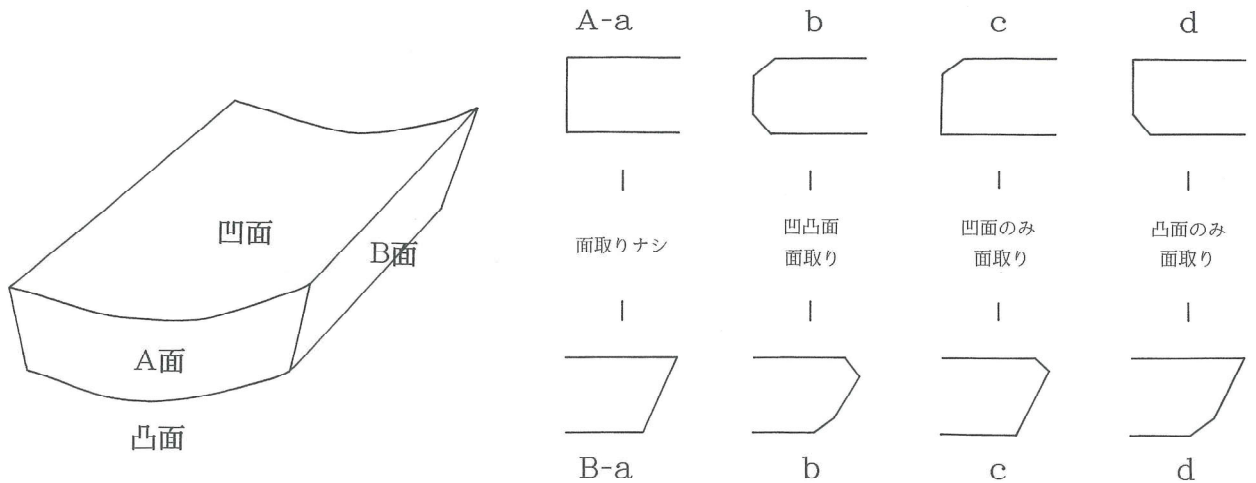


図14 平瓦模式図

図15 端部分類図

厚さはA面では主として1.8～2.1 cm、B面では主として1.9～2.2 cmあり、この中でA面、B面とも厚さが1.5 cmのものがみられる。

次に端部のタイプであるが、A面はa、b、c類がみられるがd類はみられない。B面はc類がほとんどであるが、1点だがa、b類がみられる。

厚さの比較からすると1.5 cmのものは平瓦以外の道具瓦等の可能性がある。

端部の違いはA面においては、正面と裏面の差異がタイプの差に反映していると考えられ、A-a類は裏面にA-b、c類は正面に当てはまる傾向が強いと考えられる。これは、完形品の観察により読み取ることが可能である。A-b類においては正面を成型台よりも前に出していると考えられ、正面部分と考えられるものの中に若干の段を持つものがありこの部分は成型台よりはみ出す部分と考えられる。そのためにA面の正面部分では凹面部分の面取りを施すものだけでなく凸面にも面取りを施すものがみられるのではなかろうか。A-c類に関しては凸面の面取り工程が省略されていると解される。A-a類にあてはまる裏面に関しては作業工程上、面取りを施さないものが多いのではなかろうか。ただA面正面部分のものと考えているA-c類の中には裏面のものも含まれている可能性は考えられる。

次にB面であるがB-a類は図11の平瓦で明かに他のものと異なり古式のものに該当すると考えられる。

1点のみということ弱い面はあるが古新のもの制作技法の差異を示すのであろうか。B-b類のものはA面の厚さから道具瓦の可能性があるので平瓦との制作技法の差異を示すのであろうか。B-c

類は成形・調整の際の状況によって認められるものと考えられ、平瓦の製作法に要因があると考えられる。ここで出土した平瓦の凸面には離れ砂が認められることから凹型台を用いた成形・調整を行っていると考えられる。また、凸型台の使用も平瓦成形・調整時には認められるということであるが、(33) このものに限ってみると凸面の調整がみられるものがあることから凸型台の存在は考えられるものであるが、凹面の丁寧な調整に比べると離れ砂の痕跡が顕著にみられることなどにより凸型台を用いてまでの成形・調整を行っているかは不明瞭である。面取りをみてもB-c類は凹面が上面に来ることからB面端部の面取りは施されるが凸面は省略される形態をもつ。ここからもB-d類の存在が皆無ということから凸型台を用いての成形・調整を行っているかは不明瞭であるといえる。仮に凸型台での作業を行えばB-d類の存在は認められてもいいような気がする。

ただ、A-b類の存在は凸型台にのせた際の成形時に生じた面取りと考えることもでき凸型台の存在を積極的に否定するものでもない。

この瓦は凹面は丁寧な仕上げを行い凸面は粗い仕上げになっているのが特徴である。

(表1)

平瓦一覽表

地区 遺構名	面 類	A 面					B 面					備考 図版
		a	b	c	d	厚さ	a	b	c	d	厚さ	
A	区											
S D 0 1				●		1.8			●		1.9	12-5
				●					●		1.5	12-8
				●		2.1						12-9
						2.0	●					11-3
				●		2.0			●		2.1	
			●			2.1			●		2.1	
		●				2.0			●		1.9	
通路 0 3		●				1.9						13-11
									●		2.0	
									●		2.0	
				●		2.1			●		2.2	
			●			1.5		●			1.9	
C	区								●		2.1	13-13

第3章

第1節 まとめ

図11の平瓦に関しては凹面布目痕と凸面格子たたき痕をもつものであり、これに類する瓦としては奈良時代の古瓦からみられるようである。また、平安時代の瓦の中にも凹面布目痕と凸面格子たたき痕をもつものがあり、近隣では東播北部古窯址群の中の地藏寺窯（JZ）出土瓦の中に類似する資料がみられる。（34）この地藏寺窯の年代は同古窯址群の2段階後半と考えられており12世紀初～後半と考えられている。この瓦は地藏寺窯のものと積極的に肯定する要素を持ち合わせていないが、12世紀代のものとするならば、正暦二年（991）創建とされる神積寺の存在した時期と重なるものであり、創建時に近い時期の瓦として注目される。この遺物は瓦としては神積寺創建時に限りなく近いものと言うことができ、過去の周辺調査においてもこの時期の瓦は出土していない。これは過去の調査が限定された場所であったことや近世の削平を受けていることに要因するものであり、そのため出土遺物として認識されなかったのであろうか。ただ、この時期の遺物は土器類に関しては出土していることから瓦葺き以外の建物の存在が考えられる。限定された場所は七堂伽藍を有した場所ではなく院が存在したと考えられる場所であり、院等は瓦がみられない建物として考えられ本堂をはじめとする伽藍には瓦が葺かれていたと考えることも可能である。この一点の瓦は少なくとも伽藍においては瓦が葺かれていた可能性を示唆するものとして貴重なものということができる。

他の燻し瓦については奥院（開山堂）に隣接して出土していることから、奥院関連の遺物として考えることができる。奥院の創立年代が17世紀後半ではないかと考えられることから、少なくとも17世紀後半以降の瓦とすることができるのではないかと。詳細な年代は今の所不明確であるが今後の検討材料をまって考えていきたい。

神積寺周辺は開発の波に押され変貌をとげているが十分な調査が施されているかは憂慮せねばならない。神積寺を考える上で貴重な情報は過去にも提供されているはずである。それらの整理・検討を要して神積寺の姿を考えることは当地域を考える上で重要な要素を持つ。神積寺を中心に発展してきたと考えられる周辺集落やその祖先の足跡をみることにより地域の歴史観をさらに深めていくことが肝要であると考えられる。

- (33) 上原真人「平瓦製作法の変遷—近世造瓦技術成立の前提—」『播磨考古学論叢—今里幾次古希記念論集』1990年3月 今里幾次古希記念論集刊行会
- (34) 岸本一郎・森下大輔「東播北部古窯址群の基礎資料—西脇市南部及び加東郡北部に分布する奈良・平安時代の窯址群—」『播磨考古学論叢—今里幾次古希記念論集』1990年3月 今里幾次古希記念論集刊行会

(表2)

遺物観察表

番号	器種	法量(厚さ)cm	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考	遺構	挿図	図版
1	平瓦	B面1.9	密(3~5mm大の砂粒を含む)	青灰色	良好 須恵質	凸面 格子タタキ 凹面 布目痕		A区 SD01	11-3	9
2	丸瓦	2.0	密(1~2mm大の砂粒を含む)	黒色	良好	凸面 ケズリ 凹面 布袋痕	燻し	〃	12-4	10
3	平瓦	A面1.8 B面1.9	〃	〃	〃	凸面 ナデ 離れ砂 凹面 ナデ	〃	〃	12-5	9
4	道具瓦? ?	2.0	〃	〃	〃	凸面 ケズリ、ミガキ 凹面 ナデ	〃	〃	12-6	10
5	丸瓦	2.0	〃	〃	〃	凸面 布袋痕、棒状 タタキ	〃 赤色顔料	〃	12-7	〃
6	道具瓦? ?	A面1.5 B面1.9	密(2~3mm大の砂粒を含む)	黒灰色	〃 やや硬質	凸面 ナデ 離れ砂 凹面 ヨコナデ	燻し	〃	12-8	〃
7	平瓦	A面2.0	密(2mm大の砂粒を含む)	黒色 (暗灰茶色)	やや良 燻しが弱い	ナデ	〃	〃	12-9	9
8	〃	1.9	密(1~2mm大の砂粒を含む)	黒色	良好	凸面 離れ砂	燻し	A区 SD02	13-10	11
9	〃	A面1.9	密(1mm大の砂粒を含む)	〃	〃	凸面 離れ砂 凹面 タタキ状痕	〃	A区 通路03	13-11	〃
10	丸瓦	2.0	密(2~5mm大の砂粒を含む)	〃	〃	凸面 ケズリ 凹面 布袋痕	〃	C区	13-12	12
11	平瓦	B面1.9	密(2mm大の砂粒を含む)	〃	〃	凸面 ナデ 凹面 ナデ	〃	〃	13-13	〃
12	道具瓦? ?	2.2	密(1~2mm大の砂粒を含む)	〃	〃	ナデ	〃 穴1ヶ所	〃	13-14	〃

图 版

図版 1

妙徳山神積寺遺跡



神積寺遺跡遠景



神積寺遺跡より加治谷集落を望む

図版 2



A区調査前状況

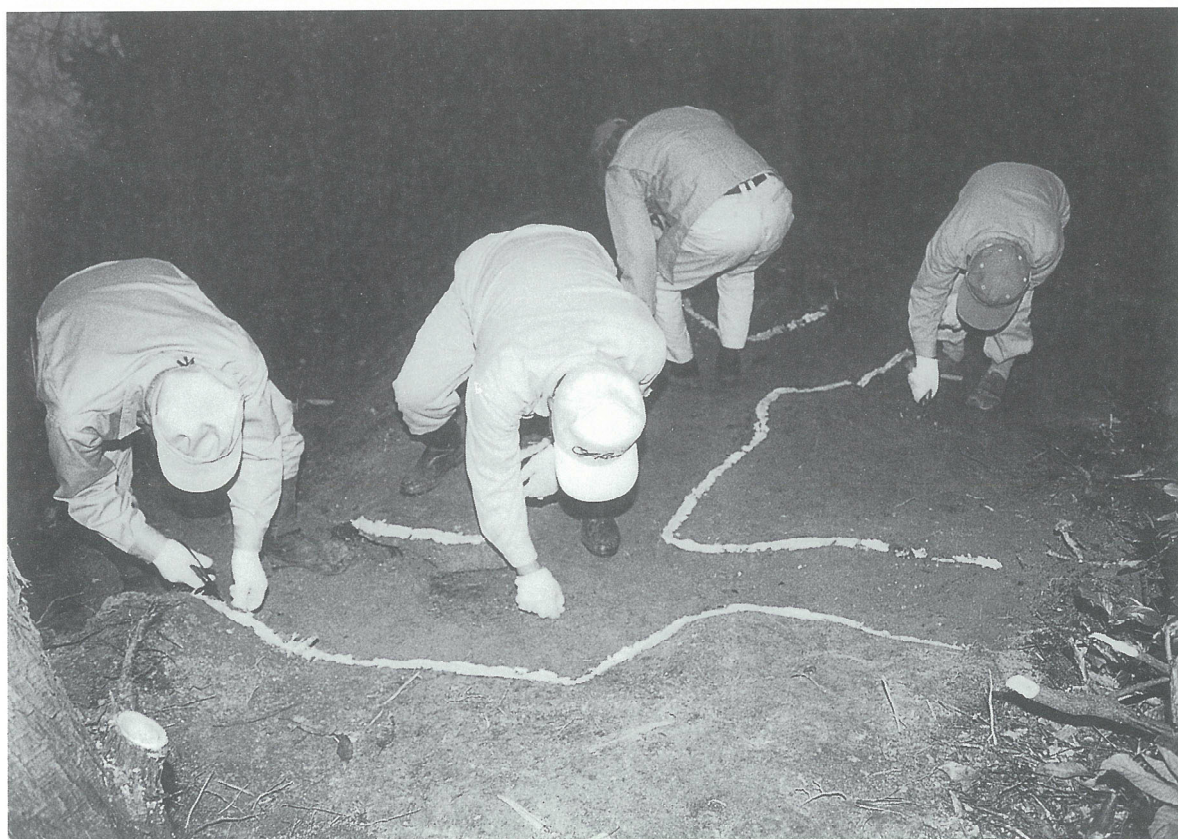


B区調査前状況

図版 3



C区調査前状況



作業風景

图版 4



A区SD01 検出状況



A区SD02 検出状況



A区通路03 検出状況

图版 5



A区SD01 完掘状况

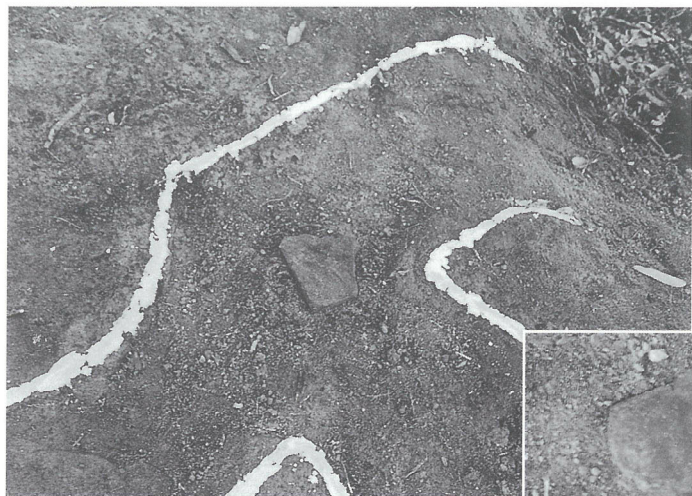


A区SD02 完掘状况



A区通路03 完掘状况

图版 6



◀ A区 遺物出土状況
SD01



A区 遺物出土状況 ▶
SD01



◀ A区 遺物出土状況
通路03



A区 遺物出土状況 ▶
五輪塔残念

图版 7



◀ B区 完掘状况

▼ B区 完掘状况



◀ C区 完掘状况

▼ C区 完掘状况

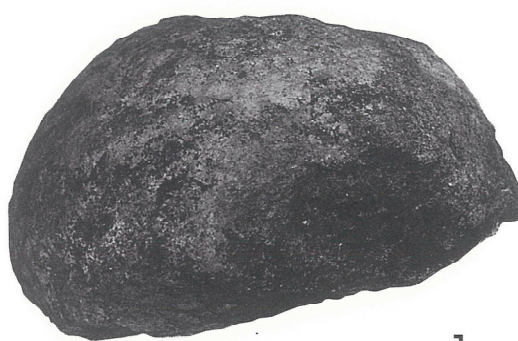


图版 8 石造物残欠



1

◀ 五輪塔残欠
▼



1



2

▲
宝篋印塔残欠 ▶



2

图版 9

A区SD01出土遗物



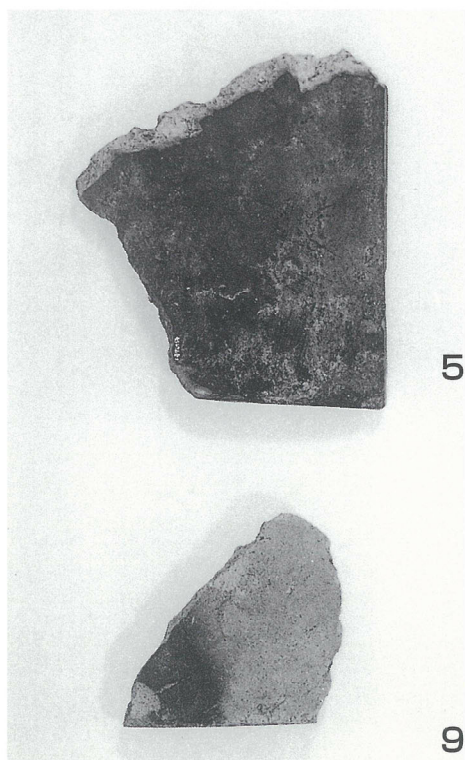
3

凸面



3

凹面(平瓦)



5

9

凸面

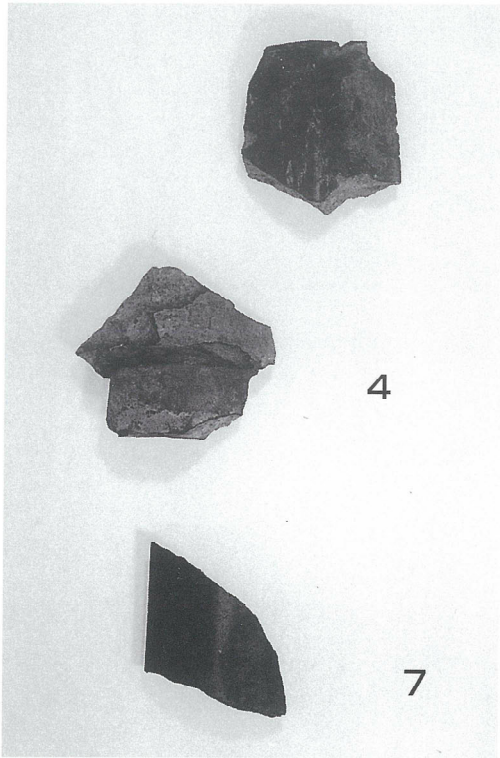


5

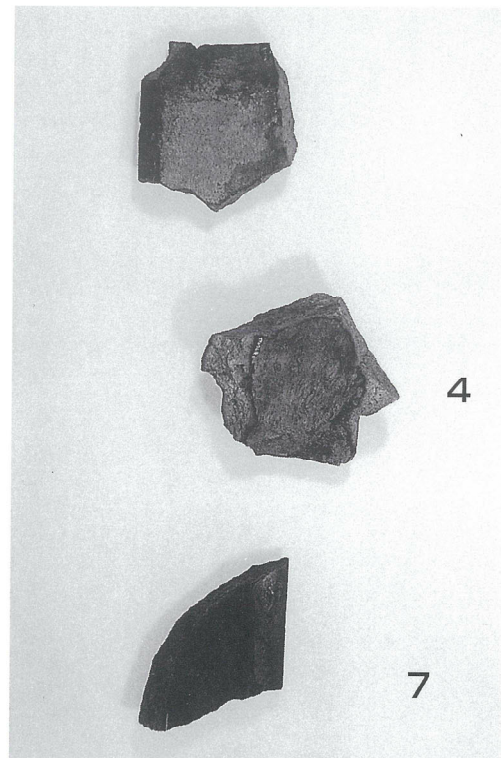
9

凹面(平瓦)

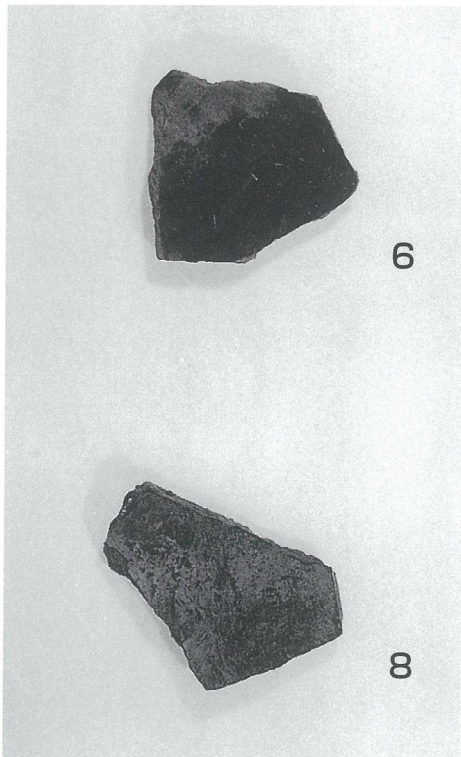
图版 10



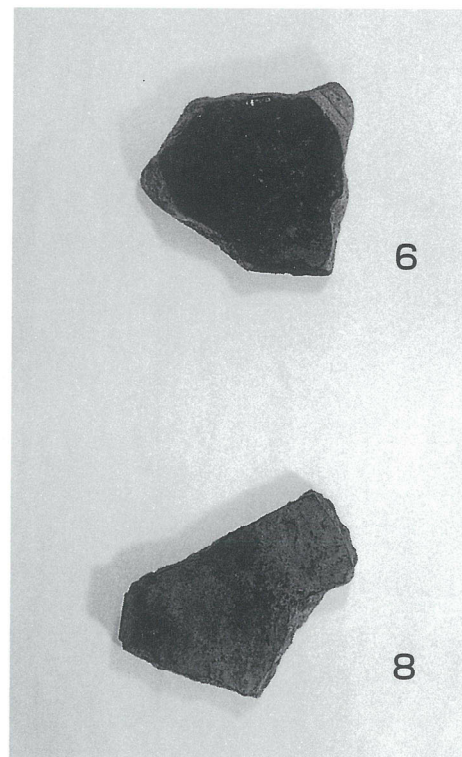
凸面



凹面(丸瓦)



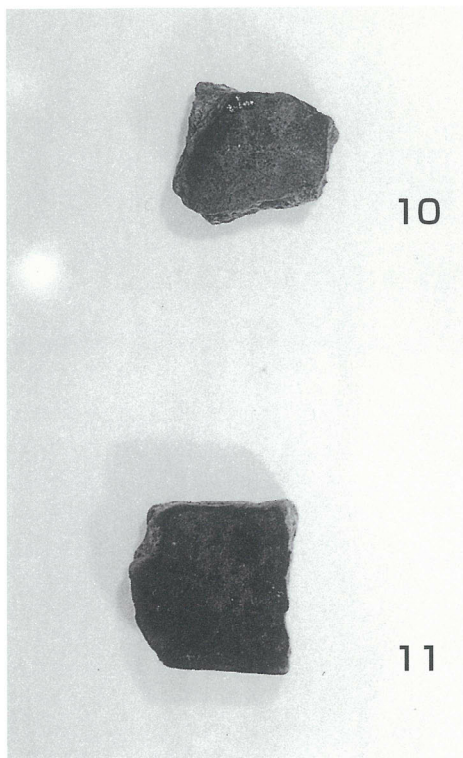
凸面



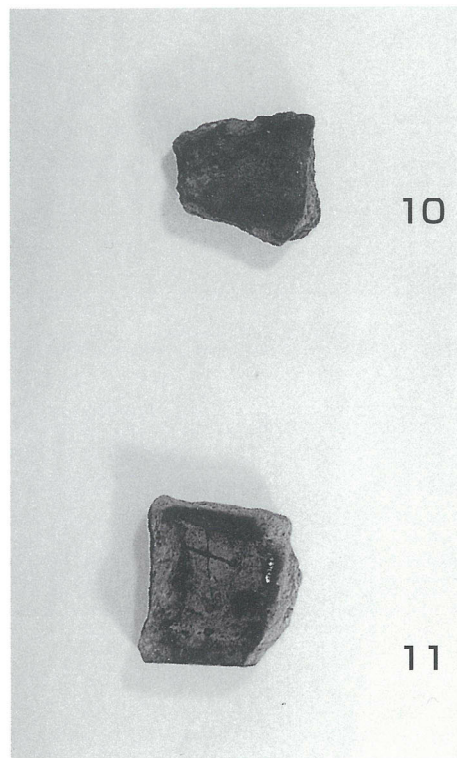
凹面(平瓦·道具瓦)

图版 11

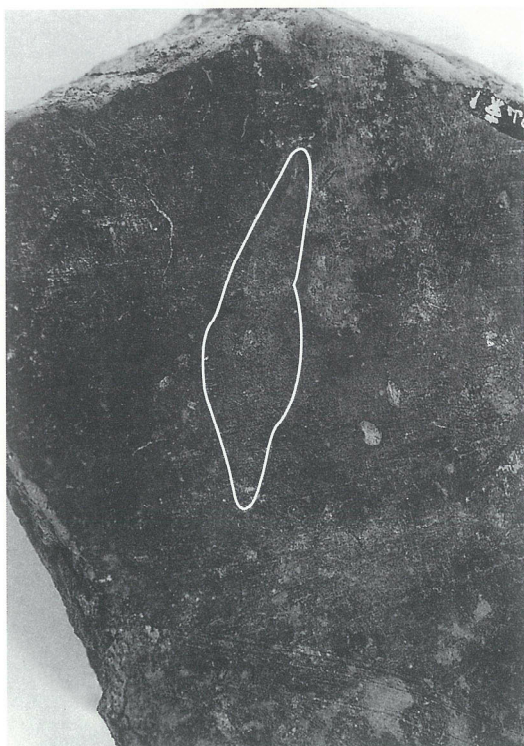
A区出土遺物 (6 = SD01 10 = SD02 11 = 通路03)



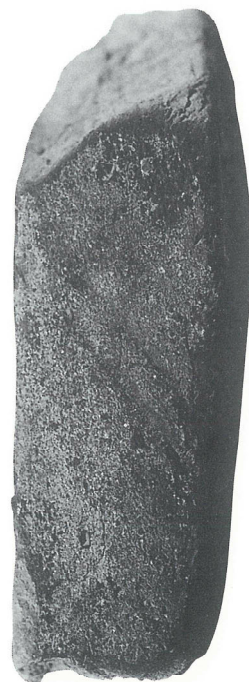
凸面



凹面

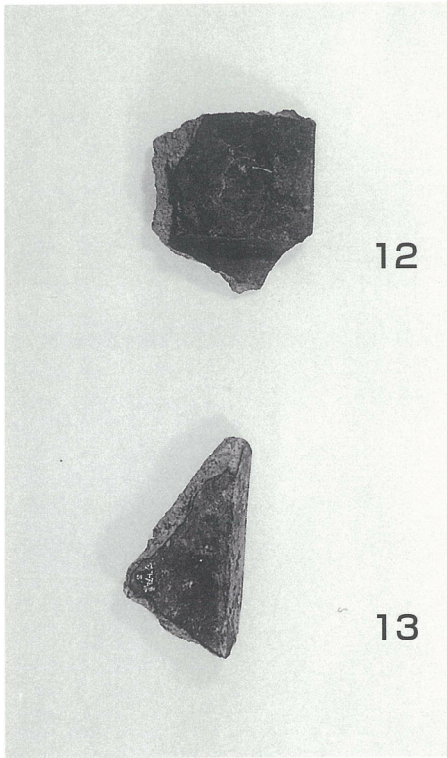


赤色顔料?

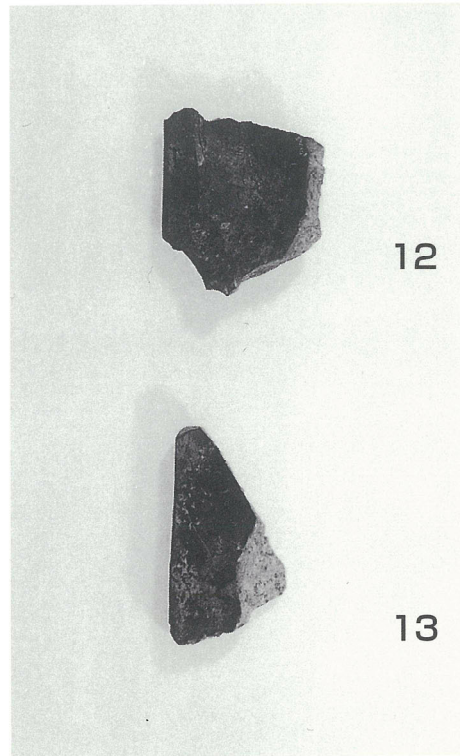


A面 正面
夕夕キ状痕

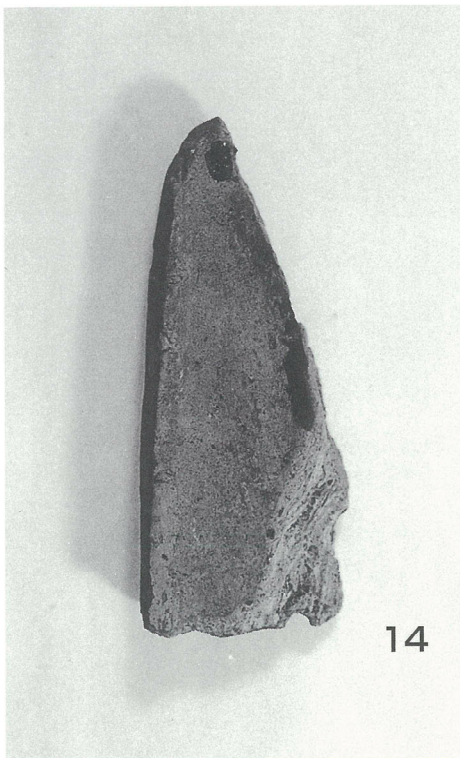
图版 12 C区出土遗物



凸面



凹面(平、丸瓦)



凸面



凹面(道具瓦)

報告書抄録

ふりがな	みょうとくさんじんしゃくじいせき						
書名	妙徳山神積寺遺跡						
副書名	フロヤ池改修工事に伴う緊急発掘調査						
巻次							
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財発掘調査概要報告						
シリーズ番号	4						
編著者名	出田 直						
編集機関	福崎町教育委員会						
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1 TEL0790-22-0560						
発行年月日	西暦 1999年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号					
みょうとくさん 妙徳山 じんしゃくじ 神積寺	ひょうごけんかんざきぐん 兵庫県神崎郡 ふくさきちやう 福崎町 ひがしたわら 東田原 あびみょうとくさん 字妙徳山	28443	34度 57分 25秒	134度 46分 30秒	19981111) 19981113	100	フロヤ池改工 事に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
妙徳山 神積寺	寺院	中世 近世	溝状遺構 通路跡		瓦 五輪塔残欠 宝篋印塔残欠	神積寺創建時に 近い瓦の出土	

福崎町埋蔵文化財調査概要報告4

妙徳山神積寺遺跡

1999(平成11)年3月31日

編集・発行:福崎町教育委員会
神崎郡福崎町南田原3116-1
TEL.0790-22-0560

印 刷:福島印刷株式会社



